

呪術師としてパーティーに貢献してたのに、裏切られて殺されかけたので呪いで復讐してやる。美人で優しい幼馴染だけは見逃してやろうと思ったけど、今さら告白されたってもう遅い

木村直輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【あらすじ】

勇者ルクス率いる凄腕ぞろいの有名パーティーで呪術師をしていたアモールは、一流パーティーに見合うだけの實力を持っていたにもかかわらず、地味で陰湿だとパーティー内外からお荷物あつかいされていた。

そんなある日のダンジョン探索で、大型モンスターとの戦闘中、パーティーメンバーからわざと攻撃されたあげく置き去りにされてしまったアモール。

死を目前にしたその時。裏切ったメンバーたちへの強い怨みが、アモールを最強の呪術師に変貌させた。

「二人ずつ、最高の舞台を用意して殺してやろう……」

アモールは復讐を誓い、新たな一步を踏み出した――。

※その直後、可愛い少女（しかも主人公の大ファン）を助けてお家にお邪魔しちやうのもこのお話です

プロローグはいわゆる「神の視点」ですが、本編は「主人公の視点」で語られます。

追記）プロローグを飛ばすとわからないところなど出てくると思いますので、折角ご興味を持って頂けたのなら飛ばさずに読んで頂けるとうれしいです。

【はじめに】

この散文は筆者が個人的に執筆したものです。

当散文は読まれる方によって不快に感じる場合がございます。特に《グロテスク》な描写や《凄惨な内容》が苦手な方はご注意ください。

【マルチ投稿】

「小説家になろう」などの複数のサイトで公開しています。

公開サイト全てに「ハーメルン」のリンクを貼っています。

目次

プロローグ 「報復絶倒」	1
第1話 「抱腹絶倒の目覚め」	7
第2話 「目覚めたならクラス」	10
第3話 「アモールの優しさ」	14
第4話 「子鳥は巣にかえる」	17
第5話 「乙女は月の満ち欠けに護られて」	21
第6話 「口にできない人参の桂剥き」	27
第7話 「しん中の毒」	34
第8話 「胸に残る温度」	38
第9話 「ほうふくぜつとうのこくはく」	45
第10話 「」	52
サブタイトルの解説	
「報復絶倒」と「クラス」の解説	60
「子鳥は巣にかえる」の解説	63
「しん中の毒」の解説	65
【蛇足】解説・思い	
1. 王道をゆく個性	68
2. 主観で構築された世界	71
3. アモールの人物像	74
4. 切り捨てた者の目線	80
5. 私の思い（直接的なテーマ）	83
6. 私の思い（本質的なテーマ）	86

プロローグ 報復絶倒

「……来たぞ！」

勇者ルクスが叫び、閃光の如く腰の太刀たちを抜く。

「ニャオーン！」

モンスターたちの咆哮がダンジョンに響き渡る。

薄暗いダンジョンの内壁、その陰から姿を現した十数匹のモンスターはネコマタだった。

「はぁーア！」

ルクスが突き出した太刀の刀身は瞬く間に閃光そのものとなり、跳びかかって来る化け猫、ネコマタの逆立った毛におおわれた皮膚を焼き貫いて心臓を突き抜ける。

——我ライトニング・フォワードらの道に栄光のあらんことを——！

辺りに獣の肉が焼ける焦げくさい臭いが漂うが、美しい容姿を勇姿で染め上げたルクスは構うことなく、行く手を阻むネコマタたちを一瞬で突き殺してゆく。

「ルクス！ 後ろ！」

後衛でその戦いを見守っていた美しい女性ルチアが叫ぶ。

「っ！」

振り向いたルクスの目の前で、今にもその鋭い歯牙を勇者の綺麗な肌突き立てようと宙に身を投じていたネコマタが、突然、痙攣し右になびく。胴体を横方向から燃える刃が打ち抜いたのだ。

——栄ラッシュ・ブグ・ラスプ光はこの手の中に——！

「ふっ！」

すかさずルクスは身をひるがえし、失速しながら降りかかってくるネコマタの死骸をかわして、背後に迫っていたネコマタへくれてやる。

「ありがとう、イグニス！」

「ふっ。例には及ばんさ」

忍者のイグニスは燃えるクナイをふうつと吹き紫煙をくゆらせると、横目で呪術師のアモールを睨んだ。

「それより、ネコマタたちの動きが早くないか？　アモール、ちゃんとデバフとやらをやっているのか？」

「やつ、やってるよー！」

オドオドと声を張り上げるアモールからもう視線をそらし、イグニスと言った。

「そうか。なら、いいが……」

そんな二人の様子を、ルチアは不安そうな顔で見ている。

「はあーアー！」

最後のネコマタをルクスの閃光が貫き、ダンジョンには束の間の静寂が戻ってくる。

ルクスは太刀を鞘に戻し、後衛のパーティーメンバーの方へ駆けて来た。

「お疲れ様、ルクス。ここ、ちよつと血が出てる。待つて……、んっ」

—— 〃サの身にシヤのイのンのラを〃——！

ルクスの傷口に手を添えてルチアが息を漏らすと、たちまちその傷は完治してしまった。

「ありがとう、ルチア。荷物、持つよ」

「……ごめんね、ルクス。ただでさえルクスには負担かけてるのに。あつ、これは大丈夫だってば。軽いから」

そう言つてルチアは、小さな背負い袋まで持とうとするルクスに微笑んだ。

「せめて、もう一人男手があればいいんだがなあ」

絡繰り忍具の手入れをしていたイグニスはそう言うと、アモールを一瞥していちべつから皮肉を込めて笑つた。

「ああ、アモールは雄々しい雄々しい男の子だったか。貧弱すぎて、女が二人いるんだと錯覚していたよ。すまないすまない」

「イグニス……」

不安そうな面持ちで紅一点のルチアが呟く。

「ああ。悪かったなルチア。別に女を馬鹿にするつもりはないんだ。ただ、俺はコイツが」

「イグニス、今はやめてくれ。いつもごめんな、アモール。アモールも

ほら、なんだ？ デバフ？ 頑張ってくれてるよな？」

「……う、うん」

「うん。じゃあ、みんな。気を取り直して、行こうぜ！」

ルクスが笑顔でそう言うと、パーティーメンバーは再び前を向いて歩き出した。

それぞれの思惑を、胸に――。

*

『ダンジョン』。

百五十年前の大戦により、一つになっていた世界は再び分裂し、このヘリオス列島で『ダンジョン』という名称はもはや死にかけていた。

しかし、世界ギルドが残したギルドのシステムはいまだに色濃く残っており、数多の民が今なお徒党を組んで『黄泉蔵』に潜り生計を立てている。

ルクスをリーダーとするこのパーティーも、そんなよろずのパーティーの一つであり、カチカチ国の中では指折りのつわもの集団として名を馳せていた。

『勇者』や『閃光のルクス』と謳われるリーダーは、その太刀でどんな頑丈な『ものけ』もたちまち仕留めてしまう凄腕の武士であり、そのルクスと相まって多くの民に愛されている。

そんなルクスの幼馴染であるルチアもまた、絶世の美女でありながらあらゆる傷や病をたちまちに癒してしまう陰陽術の使い手であり、『聖女』や『女神』と呼ばれ偶像の如く崇拜されている。

さらに、たった一人で悪徳な権力者たちを相手取り戦っていた庶民の人気者、義賊イグニスを迎えてからは、実績も人気もとどまるところを知らず、カチカチに彼らを知らぬ者なしと民の間では評判だった。

しかし、ルクスとルチアの幼馴染である呪術師のアモールだけは違っていた。冴えない見た目と呪術という陰険な戦法などから、パー

テイーの闇や面汚しだと囁かれ、様々な黒い噂が絶えなかつたのだ――。

*

「アーハアー！」

全身を叩き揺さぶらんばかりの咆哮を浴び、アモールは恐怖で硬直した。

「あれは……、ダイダラボッチ……！」

巨大な人型のもののけが、不気味な真夜中の古戦場をそのまま黄泉蔵に落とし込んだような大広間に、だらりと突っ立っている。

「マズいぞ、ルクス！ 流星にあのデカさのものけじゃ、今の装備では太刀打ちできん！」

「でも、逃げる隙はなさそうだ……」

険しい顔でそう言ったルクスの見据える先には、上空から疾風の如く飛来するノブスマの群れがあつた。

「……」

ルチアは何も言わず、不安げにアモールを見る。

「イグニス！ 援護を頼む！」

すでにパーティーのメンバーたちより前へ出ていたルクスは、すーっと流れるように麗しくその名刀を抜き、瞬く間に刀身を光へと変えて光速の刺突を放つ。頭上に迫っていたノブスマたちは、一瞬の内にボトボトと床に落ち骸になっていった。

「安心しろ、ルチア……」

イグニスは不安そうなルチアと一瞬視線が合わさるとそう呟き、すかさず懐から取り出した奇怪な形のクナイ三本を、籠こて手に擦る。ぼうつと炎がともった次の瞬間、ノブスマの群れに向かってそれは投げられた。

ドゴアーン！ と間もなく盛大な爆音が響き渡り、かなりの数のノブスマだったものが床へと散っていく。

そして、晴れていく爆煙。その奥に見えたのは――。

「なっ、イツタンモメン?!」

数切れのイツタンモメンと無数のノブスマが、まるで赤い月が浮かぶ夜空のような黄泉蔵の天井、その暗闇の遥か彼方から飛んできていた。

「アアーハアアア〜!」

ダイダラボッチも爆音に興奮し、その巨体で辺りを揺らしながらパーティーの方へと向かって来る。

「おい、アモール! これをルクスに届けてくれ!」

イグニスはその言って三種類の火薬玉を手渡した。

「えっ? なんで、俺が……」

「俺は援護で忙しい! お前は暇だろ! 上空からの敵が多すぎる!

ルクスにもいくつが必要だ! わかったらさっさと持っていけ!」

「えっ……、でも……。俺もデバフを」

「なんだ?! ルチアに行つて来いとも言うのか?! お前以外誰がいる!」

「……わ、わかった」

アモールは震える手で火薬玉を受け取り、突つ張る足でルクスに向かって走り出した。

そんなアモールを不安そうに見送るルチアに、イグニスがうなずいて見せる。

「大丈夫だ。きつと上手いく」

「……うん」

一方、何度も足をもつれさせ転びそうになりながら走っていたアモールは、ついにルクスのもとまで辿り着き、火薬玉を差し出す。

ルクスはそれを待っていたかのように数歩下がると、アモールと並んで悲しそうに言った。

「すまない」

「……うあつ!」

突然、アモールの脚に激痛が走る。

驚きのあまり火薬玉を落として地に伏したアモールは、視界の隅でルクスが二つの火薬玉を拾い、走り去るのを見た。

「ルク、ス……い！」

上空からの爆音を聞きながら、遠ざかっていくルクスの方を見ると、イグニスが燃えるクナイを手にこちらを睨んでいるのが目にとまった。

アモールがまさか、と思ったのも束の間。投げられたクナイが、ルクスの目の前に残っていた火薬玉に突き刺さった。

強烈な悪臭と共に煙が周囲に広がり、アモールは脚の激痛と猛烈な吐き気で涙を流す。目の前で炸裂した火薬玉は、もののけの忌避^{きひ}効果が高いかわりに人体への害も大きい煙幕だったのだ。

「なんで……。なん、で……」

アモールの空^{むな}しい声が、黄泉蔵の喧騒^{むな}に紛れて消えた――。

第1話 「抱腹絶倒の目覚め」

「なんで……。なん、で……」

俺は吐き気をもたらす煙の中、悲しみの言葉をこぼして涙をおとした。

俺は、裏切られたんだ。あいつらはずっと、俺のことをお荷物だと思ってた。視線が、態度が、それを物語ってた……。

痛い。痛い。脚が、胸が、心が、体中が痛い……。

最初は、幼馴染のルチアとルクスに誘われて三人で組んで、ゆる〜く黄泉蔵の探索をしてただけだったのに……。

二人ともどんどん強くなつて。ルチアは戦わないけど、一瞬でルクスの傷を治せるようになったし。ルクスも、急に落ちてくる頑丈なナベオロシだって、現れた次の瞬間には一刀両断できるようになって……。

しかも、あのイグニスが来てから余計に俺たちは強くなって、周りからの期待もどんどん上がって。黄泉蔵探索は大変になつたんだ……。

だから、俺も頑張つて呪術で支援してたのに……。もののけにデバフをかけたり、してたのに……！

呪術なんて陰湿だとか、陰惨な顔にぴったりだとか、性格が陰気だから仕方がないとか、陰で悪口言われて、噂されて……。デバフ、とか言い方変えてみても、印象はよくなるなくて……。逆に変なこだわりが気持ち悪いとか言われて……。

みんなみたいに目に見えた結果がないから。敵を倒したり、傷を治したり、そういうんじゃないから。俺は何もしてないなんて言われて……。一人じゃ何もできないから。お荷物だって、陰口言われて……。

「うう……。うぐつ。ケホツ、ケホツ……」

煙幕で喉が痛い。目が痛い。

でも、俺を苦しめる煙も次第に晴れてきていた。しかし、それは同時に、俺を隠してくれていた目くらましがなくなることも意味してい

た。

「アーハア〜ア！」

ダイラダボツチの咆哮が俺の身体を揺する。

地面に突っ伏す俺の視界は、もう十分明瞭になっていた。

そして、当然そこに仲間たちの姿はない。ルチアの、姿も……。

赤く暗い黄泉蔵の空間が広がっているだけだ。

「アアーハアアアアアアア！」

地響きが俺の身体に響く。ダイラダボツチが近づいてきているのだろう。

俺は振動を受けて気持ち悪さが頂点に達し、吐きそうになる。

「……………くそお」

俺の頭に、かろうじて仲間だった者たちの顔が浮かぶ。

幼馴染だったのに、俺を裏切ったルチアと、ルクス！

そして、俺にいつも強く当たったあのイグニス……………！

「……………せない」

俺は、呟いた。

「許せない。許せない、許せない、許せない、許せない」

許せない許せない許せない許せない許せない！

「うわぁー！」

激情のままに叫んだ俺の周りが、急に一層暗くなった。それは、ダイラダボツチが俺に迫っていたからだ。

そして、地面に倒れる俺の体にダイラダボツチの巨大な足が降ってくる。

ズドオン！ と途轍もない音が辺りに鳴り響き、ダイラダボツチは黄泉蔵の床に倒れていた。

そして、俺は、立っていた。漲る力みなぎに突き動かされるように、俺はそこに立っていた。

「ああ、そうか……………」

俺は気づいた。

「俺は呪術師だから、憎んでいるほど強くなるのか。呪えば呪うほど、強くなるんだ……………」

振り返ると、哀れダイダラボッチが地べたに倒れ死んでいた。

「ふっ、ふふふふ。ふふふふふ。ふはははははははー！」

俺は赤ぐらい黄泉蔵で真っ暗な天を仰いで抱腹絶倒の快感を味わうと――。

「はあ………」

憎いあいつらが消えていった黄泉蔵の帰り道に向かって首を垂くたらした。

「やめよう」

俺はやめた。

やめたのだ。

「すぐに追って呪い殺してやってもいいが、それじゃあつまらないな。

一人ずつ、最高の舞台を用意して殺してやろう………」

俺はそう呟くと、黄泉蔵のさらに奥へと入っていった。

第2話 「目覚めたならクラス」

ドタアーン！ と大きな音を立ててオオダヌキが倒れた。

「ふはははははははは！ 気持ちがいいなあ、誰も俺をはばめないというのは……」

俺の通った後には、数多のもののけの死体が転がっていた。

俺は今や、念じるだけでものけを呪い殺すことができるのだ。

「はあー。気持ちがいい気持ちがいい」

という言葉とは裏腹に、俺の心は曇っていた。

「……ここは、ここはどこだー！」

そう、俺は黄泉蔵で道に迷ってしまったのだ。この辺は入り組んでいて迷いやすい上に、いつも先頭を歩くルクスも、来た道を把握する役のルチアやイグニスもないから、俺一人では迷ってしまうのも無理はない。

「はあ。よっこらせつと」

俺は、洞窟のような黄泉蔵の地面から突き出している手頃な石を見つけると、腰掛ける。硬くて座り心地はイマイチだが、地べたに座るよりは気分的にマシだ。

「腹が減った……。喉が渴いた……」

しかし、なんの荷物も持っていないかった俺は、空腹を満たす物も喉の渴きを潤す物も持っていなかった。こんなことなら、非力とはいえ少しの食糧くらい持っておくんだった。このままでは復讐を果たす前に死んでしまう……。

「それは嫌だー！」

「嫌ですー！」

俺の控えめな叫びとほとんど同時に聞こえた女の子の声に、俺は辺りを見回した。しかし、目に映るのは黄泉蔵のごつごつとした壁ばかり。

俺は立ち上がると、ゆっくり声の主を探して歩き出す。

そして、角を曲がれば角がある、入り組んだ黄泉蔵のその角を三回ほど曲がった先の岩陰に、いくつかの人の頭を発見した。

「お嬢ちゃん。約束したでしょお？ おじさんたちの言うことちゃんと聞くて」

「そうだよお？ 大丈夫。おじさんたち慣れてるから、痛くしないって」

「そういうことじゃないです！ そういう意味だなんて、思わないじゃないですか……！」

「それはお嬢ちゃんが甘かったんだから、おじさんたちは知らないよ」「これで一つ、大人になったね。もっと大人にしてあげるよ。へへへへへ」

「どうやら数人の男たちが、いかがわしいことをしようとしているようだった。」

「おい、お前！ 何の用だ！」

突然、その声がして、俺は背後から腕を掴まれる。

「わっ、あっ、いや。なんか騒がしいから、どうしたのかなって……」

「お前っ。いや、何でもない。あっちにいつてろ」

男は俺をじろじろ見ながら、腰に差している太刀の柄を手で撫でた。

「おい、どうしたあ〜？」

「何でもない！ 部外者が近づいてきただけだ」

「あく、仲間に入りたいんじゃないか？」

「そう言つて岩陰から男たちがこちらを見てきた。」

「おお？ お前、ルクスと組んでるアモールじゃねえか！」

「ああ、ホントだ。どうしたー、こんなところに一人で。もしかして、ついに仲間に見限られて見捨てられたかあ？ ゲハハハハ、あっ！」

俺は男の言葉に、いくらか落ち着いていた憎しみを逆なでされ、咄嗟に呪い殺した。

「おっ、おい！ どうした、ファルス。うううっ、うぐっ！」

「おい、何してんだよう……、うっ！」

「おっ、お前ら？ 何ふざけてっ……、ええっ！」

俺は全員を呪い殺すと、ヤツらに背を向けて歩き出した。

くそっ！ ムカつく……。くそがつ！ ザコのクセしやがつて！

「待つてくださいー！」

俺が怒りに身を震わせながら振り替えると、そこにはまだ幼さの残る少女がいた。

ルチアほどではないが、とても可愛らしい。栗色の髪を肩くらいまで伸ばした彼女は、黄泉蔵夫^{よみぐらふ*1} というより普通の村娘という感じの服装だった。

「あのっ！　ありがとうございます！」

「……ああ。べっ、別にお前のためにやったんじゃないよ」

はらわたが煮えくり返りそうだった俺は、なんとかそれだけ言うと、再び背を向けて歩き出そうとした。

「待つてくださいー！　あの人たち、どうなっちゃったんですか？」

「は？」

振り返った俺は、ぎよつとした。少女は自分が助かったというのに、目に涙を浮かべて俺を見ていたのだ。

「死んで、ないですよね？」

「……ああ。ちよつと、気絶してるだけだよ」

俺は、嘘をついた。

「よかったあ……。あつ、私、クラスついていいいます。あの人たちが、ちゃんといい子にして大人しく言うこと聞くなら黄泉蔵に連れてつてくれるっていうから、連れてきて貰ったんですけど。あんなことになっちゃって……。お兄さん。助けてくれてありがとうございます」

「……はあ」

マシンガンみたいに喋る少女の言葉を浴びて、俺は思わず鳩が豆鉄砲でも食らったみたいな顔をしていたかもしれない。

「あつ、ごめんなさい。私、いきなりこんな自分のことばっか喋っちゃって。お兄さん、アモールさんに似てますよね？　あの有名な、ルクスさんたちと組んでらっしゃる！　私アモールさんの大大大鼻肩筋^{*2}なんです！　でも、まさか、ご本人なわけじゃないですよ……。？　って、ごめんなさい！　助けていただいたのに、失礼ですよ。私だったら……。へ？」

楽しそうに喋る少女に何度目か背を向けようとしていた俺は、彼女

の言葉に驚いて振りかえる。

「俺の、鼻筋？」

「……えっ。もしかして、本当に、本物?! そうです、はいです、その通りです! 私、アモールさんの鼻筋なんです! あっ、待って。髪、崩れちゃってますよね。やだ、せつかくアモールさんに会えたのに……」

少女は別に崩れてもいない髪を必死に直している。なんか、可愛い。

俺はふと思いついて、訊きいてみることにした。

「俺さ、実はわけあってルクスたちと別行動しててさ。でも、あいつら俺に食料渡してくれなかったんだ。酷いよな。君、なにか食べる物持ってない? 後、飲み物もあれば……」

「わー……。おにぎりと緑茶なら持ってますよ! 私が握ったおにぎりなんです! ああ、嬉しい。私が握ったおにぎりを、アモールさんに食べていただけなんて……」

「そうか。そんなに言うなら、遠慮なく食わせて貰おうかな」

「はい! もちろんです! でも、アモールさん?」

「ん?」

急に眉間にシワを寄せてズカズカと俺に寄ってきた少女が、そんなに背の高くはない俺よりも、もつと小さな体をぐつと伸ばして、力強い笑顔で俺の顔を見上げると言った。

「——私は君じゃなくて、ク、ラ、ー、ス、ですっ!」

第3話 「アモールの優しさ」

「アモールさん、ごちそうさまは？」

「ああ、ごちそうさま……」

ぼろぼろパサパサの握り飯を雑みのある緑茶で胃に流し込んで、俺は久しぶりにその挨拶を生き返らせた。

「どうですか？ 美味しかったですか？」

「まあ……」

「よかったー」

クラースは満足そうにそう言うのと、嬉しそうに微笑んだ。

「クラースは食べないのか？」

「はい！ アモールさんにあげた分しかありませんから！」

「それは、わるかったな……」

「いえ！ 私、お腹空いてないですし」

そう言ってももう何度目か、お腹を鳴らしたクラースは、決して崩れないのではないかと言うほど頑丈そうな笑顔で言い切った。

「命を助けて貰ったんですから！ アモールさんは気にしないでくださいー」

「はあ……」

いつの間にか彼女の中で、俺は命の恩人にまでなってしまったようだ。それとも彼女にとって、貞操は命と同義なのだろうか。

何にせよ、気まづくなつた俺は、適当に話題を変えようと疑問に思っていたことを聞いてみた。

「クラースは、なんで黄泉蔵夫でもないのに黄泉蔵に來たかったんだ？」

「それは……。あの、ちょっとだけ重い話してもいいですか？」

なんだか少し悲しそうな笑顔でそう言ったクラースは、俺の返事を待たずに勝手に喋り出した。

「私のお姉ちゃん、って言っても実の姉じゃないんですけど。近所に住んでたとしても優しいお姉さんが、黄泉蔵夫なんです。でも、三カ月前から、黄泉蔵に行ったつきり行方不明で……。だから、私、お姉

「ちゃんを探したくて……」

「それはもう、死んでるだろ……」

思わず言ってしまうてはつとなつた俺を見るクラースの目は、大きく開いてゆらゆら揺れた。でも、彼女の笑顔は揺るがなかった。

「そーんなはずはありませんー！ お姉ちゃんはとーつても強いんだから！ アモールさん、私のお姉ちゃんを知らないからそんなことが言えるんですよ？ お姉ちゃんはとーつても強いんですから！

だから。だから、私は探しに来たんですから！」

「そうか……」

俺はまた気まずくなつて、今度は黙り込んだ。

「じゃあ、帰りましょうか？」

「えっ？」

立ち上がったクラースを見あげる俺に、彼女はどこか寂し気な顔で笑った。

「おじさんたちには騙されちゃったし、流石に私一人では黄泉蔵を探せません。アモールさん、もう帰るんですよね？ ごめんなさい。私も連れてつてください」

「……ああ。まあ、それぐらいなら……。ついでだしな」

俺はそう言つて立ち上がると、歩き出した。

「なあ、ほんとにいいのか？」

「えっ？」

「だから、お姉ちゃん探さなくて本当にいいのかつて訊きいてるんだよ」

「えっ。でも……」

「あー、もう、じれつたいなあ。帰るついでに軽くなら探すの手伝つてやるよ。なんか手掛かりないのか？」

「アモールさん……」

クラースは目を潤ませながらも、嬉しそうに張りのある声で言う。

「ありがとうございますー！」

「お礼はいいから、なんか手掛かりはないのか？」

「手掛かり、つてほどじゃないですけど……。あの日、お姉ちゃんは私の幼馴染と黄泉蔵に来てたんです。それで、彼は、黄泉蔵に入るのが

初めてで……。だから、そんなに奥には来てないと思うんです」

「はあ？　じゃあなんでこんな奥まで来たんだよ」

「それは、あのおじさんたちが、きつと調子にのって奥まで入ったから帰れなくなったに違いないとか言って、ぐんぐん進んで行くから……。私についてはいくしかなくて……」

「はあ……。まあ、そういうことなら完全に帰るついでだ。これでも俺は、あのルクスたちと組んでずつと活動して来た呪術師だからな。救助依頼も何件も受けてるし、初心者が躓つまずきそうな場所にもいくつか心当たりはある。そういう場所を重点的に通りながら帰る、つてこと
でいいか？」

「はいー」

満面の笑みで返事をしたクラースの顔は、あのルチアにも劣らないくらい、なかなかどうして可愛かった。

第4話 「子鳥は巢にかえる」

「クラース、幼馴染のことは心配じゃないのか?」
「え?」

ぐねぐねと切り立った黄土おうどの道を歩きながら、ふと疑問に思った俺は訪ねてみた。

「いや、お姉ちゃんお姉ちゃんって。クラース、お姉ちゃんのことばかりだからさ。幼馴染のことは心配じゃないのかなって」

「ああ、ソールイエンスのことですね」

クラースは頬を膨らまさんばかりにぐちぐちと喋り始める。

「いいんですよ、ソールイエンスは……。だって、ソールイエンスったら。アウローラ姉ちゃんアウローラ姉ちゃんって、口を開けばそればかりで。あの日だって、やっとアウローラ姉ちゃんと一緒に黄泉蔵探索が出来るって。いいところ見せるんだって、猿みたいに鼻の下なんか伸ばしちやって。初心者のクセに、あのアウローラ姉ちゃんにいとこなんて見せられるわけないじゃない。馬鹿みたい。ほんと、男の子って嫌ですよね……」

「……クラース。もしかして、お姉ちゃんがとられそうで嫉妬してたのか?」

「え? ……、そんなんじゃ、ないですよ」

「ふうん」

素っ気なくそっぽを向くクラースを見て、素直じゃないところもあるんだなと俺は思った。

「……! あれ」

突然、クラースが走り出す。

「おい! 危ないぞー!」

俺は急いでクラースを追う。

クラースは壁のない道を終わりまで駆け抜け、黄土が続くちよつとした広間の壁際まで走っていくと、大きな岩の前でしゃがみ込んだ。

「これ、お姉ちゃんに……」

クラースは拾い上げた布切れのようなものをじっと見たと思った

ら、お姉ちゃんの形見を失いたくなかったのだろう、隠すように急いでそれを懐にしまった。

「いきなり走り出すなよ。ほんとにそれ、お姉ちゃんの物なのか？」

「……はい。間違いありません」

そう言つて振り向いたクラースの後ろ、大きな岩の陰から出てきたものに、俺はぎよつとした。

「クラース！ 早くこっちに来い！」

「え？」

きよんとするクラースの背後で岩の陰から姿を現したのは、かうじて人型をしてはいるが、本能的な恐怖をかき立てる異形のものだけだった。

「ウバワ、ナイデ……。ウバワ、ナイデヨ。オネエ、チャン……」

もののけの声に向き直ったクラースが、しゃがみ込んだまま硬直している。ヤバい！

咄嗟に走り出していた俺はクラースを突き飛ばし、もののけのまがまがしい手で顔面を切り裂かれる。

「ううっ！ ああっ……」

「……いったあ。っ！ アモールさん?!」

「大丈夫だ。下がってる」

俺は呪術ですぐに傷をもののけに移す。しかし、もののけの顔に移った酷い傷はぐちゅぐちゅと音を立てて瞬く間に塞がった。こいつ、強い……。

「アア、ウウ……。ウバワ、ナイデ。ウバワ、ナイデ」

このもののけは「カエリオニ」だろう。

「カエリオニ」は呪いによつて生まれるもののけだ。

元々呪術を極めていた俺は、裏切られて殺されかけた強い憎悪の念を以て、もっ今や一瞬で人を呪い殺すことが出来る。

しかし、普通、人に対する呪いはその効果が大きければ大きいほど、そんなにすぐに効果が現れるものじゃない。もちろん、それが非常に困難だからというのは間違いない。だが、対人の場合、暗殺や戒めなどに使われることの多い呪いはそもそも、条件を満たした時に発動す

るものや、じわじわと相手を苦しめるタイプの呪いの方が需要があり、発展してきたという側面もある。

だから、対象が呪いを受けるまでに時間がかかる場合が少なくないため、呪われ切る前に、呪いとは関係のない病気や事故などで死んでしまふということも起こりうる。そうになると、呪いは行き場を失ってしまい、その多くは呪った術者にかえっていく。

普通なら単なる呪いとしてかえるだけなのだが、強力な一部の呪術や欠陥のある呪術を使った時などに、その呪いがものけという形になって術者にかえることがある。そういうったもののけ全般を「カエリオニ」と呼ぶのだ。

「オネエ、チャン……。モツテ、モツテ、モツテルジャンナイ！」

カエリオニは目の前の俺を無視して、クラースに襲いかかろうとする。

「動くな！」

俺は右手を前に構えてカエリオニの動きを封じようとデバフをかけたが、完全に止め切れず、その気色の悪い体の突撃を受けてしまう。

「くそっ！ クラース！ 離れてろ！」

「ごっ、ごめんなさい。足に、力が、入りません……」

俺の真後ろで、クラースが震える声で言った。

「くそお！」

俺は呪いを右腕に込めてカエリオニを突き飛ばした。ヤツは大岩に体を打ちつけて、もぞもぞと気味悪く悶える。

本来なら、こんな風に呪いを直接攻撃に使うのは効率が悪すぎるが、どうやら強い怨念を持つ俺は、もののけを突き飛ばせるほどの威力が出せるみたいだ。

「ウバワ、ナイテヨ……。ウバ、ウバ、ウババ」

それにしてもこのカエリオニ、クラースを狙っているのか？ それとも、クラースの持つ布切れが欲しいのか……。

本来カエリオニは、あくまで術者にかえる呪いなので、積極的にそれ以外の対象を襲うものではないし、強い呪いから生まれたものはコイツみたいに人の言葉を喋るが、知能があるわけではないから物に執

着したりもしないはずだ。

とはいえ、有能な呪術師ならカエリオ二対策を行い、自分にかえらないようにしておくことはもちろん、特別な性質を付加することができるはずだし、そもそもこいつらは完全に人間の道理が通じるような存在ではないから、いくらでも例外は起こりうる。

「ぐだぐだ考えるだけ無駄か……」

「モツテル、モツテルデシヨ？ オネエチャン。イツパイ、イツパイ」
カエリオ二がこちらに向かって来る。

俺は右手で手刀を作り、イグニスたちのことを思い出す。

あいつら、俺を裏切りやがって……。俺を、この俺を……。俺はもとも才能があったのに……。努力だつてしたし、ルクスたちと共に戦うだけの実力だつてあつたのに、馬鹿にしゃがって……。お荷物扱いしやがって……。許せない。許せない……。殺してやる。殺してやる……。

「オネエチャン。ネエ、オネエ」

「うあああああああああ！」

俺は手刀に怨念を込めて、目の前まで迫ってきていたカエリオ二の胸に突き出す。

「オ、ネエ……。エエエエエ……」

カエリオ二はぽっかり胸に穴を空けられ倒れるが、まだ消滅しない。

俺はしゃがみ込むとヤツの頭を鷲掴みにし、握り潰した。

「はあつ、はあつ。どんな呪いだか知らないが、俺のこの呪いに叶うものか……」

立ち上がって俺はクラスを振り返る。その背後で、カエリオ二が消滅していく気配がする。

「大丈夫か、クラス」

「……はっ、……はい」

おびえた顔で俺から視線を落としたクラスは、消えていくカエリオ二をただただ茫然と見つめた。

第5話 「乙女は月の満ち欠けに護られて」

「あつ、あんまりじろじろ見ないでくださいね」

まだ少し湿った髪で、クラーズは言った。

「ああ」

ここはクラーズの家。

黄泉蔵を出た俺たちは、風呂屋で軽く汗と汚れを流し、そのままクラーズの家に行ってきていた。

「今、お茶淹れますね」

「ああ、湯冷めしそうだったからちようどいいな」

勝手^{*1}に消えるクラーズを見送ってから、俺はぼーっと部屋を見回した。裕福ではない、普通の村人の民家って感じだ。

クラーズの両親はちようどしばらく家を空けているらしくて、俺は今晚この家に泊まることになった。とりあえず、依頼に関することから詳しくは言えないが、秘密裏に単独行動をしているということにしてある。でも、そんな嘘、そう長くは持たないだろう。

きつとルクスたちは、俺が事故か何かで死んだことにするはずだ。死んだことになっていた方が、復讐のために暗躍するには都合だが、俺の顔は有名すぎるから日常生活を送るのは難しくなってしまうだろう。

俺は今後の身の振り方について頭を悩ませる。

「お待たせしました。熱いですから、気をつけてくださいね」

悩んでも答えの出ない俺の前に、唐突に戻って来たクラーズがお茶を置く。白い湯気が立ち上る湯呑^{のほゆのみ}には、よく見ると小さなヒビがいくつも入っている。

俺は湯呑から視線をそらした。

「……あれ？ あれって、俺の本か？」

「あつー！」

クラーズが俺の視線の先に走っていき、隠すように本を片す。

「そんな本、素人が読んでどうするんだよ」

クラーズが片付けた本は、俺が以前に出していた呪術師向けの専門

的な本だった。とてもじゃないが、素人が読んで理解できるようなものじゃない。

「……言ったじゃないですか。私、アモールさんの、鼻筋だって……」

クラスがこちらを見ずにそう言う。

表情は見えないが、照れているのか？ なかなか可愛い……。

「もう少ししたら、夕餉ゆうげの支度しますね。納豆汁と……、そうだ！

ちよつといい梅干しがあるんです！ それで大丈夫ですか？ 好き嫌いとか、ありますか？」

「うくん……」

昼間もクラスがくれたばさばさの握り飯だけだったから、流石にそれじゃ持たないなと思った俺は、懐に手を入れて金を確認する。これからのことを考えるとあまり贅沢は出来ないが、背に腹は代えられない……。

「いいよ。一息ついたら何か買ってきてくれないか？ 金は俺が出すからさ」

「えっ、そういうわけには」

「いいっていいって。黄泉蔵帰りで腹減ってるから、何かガッツリ食いたいんだ。ついでだからクラスの分も俺が出してやるよ。うくん、そうだなあ。うな重でも食いたいな。ちよつと色付ければ、どの店でも器貸してくれんだろ」

俺は懐から、うな重を三杯は食えるだろう金を出すと、俺の前に腰を落ちつけていたクラスに渡した。クラスのやわらかい指が俺の指に触れて、俺はドキツとした。今のは、わざと……？

「……やっぱり、有名な黄泉蔵夫さんはすごいですね。こんな大金を、一晩で……」

「大した額じゃないよ」

と強がってはみたものの、今の俺にとつては結構な出費だった。金のことも考えないといけないと思うと、ますます頭が痛い。

「ありがとうございます。急いで買って来ますから、待っててくださいね！」

クラースはそう言うと、金を大切そうに握りしめて立ち上がった。「わっ！」

突然、クラースが小さな悲鳴を上げて倒れてきた。微塵も予期していなかった俺は、畳の上に押し倒される形でクラースの下敷きになる。

「いたっ……。ごめん、なさい……」

クラースのやわらかなふくらみが俺の腹に当たっていて、胸元を湿らせるクラースの言葉が頭に入っこない。幼い顔立ちだが、意外と胸はあるようだ。

クラースががぼつと起き上がり、俺から離れる。あつという間に大きくなってしまった俺のちんこが、まだクラースの温かな重み覚えていて、しばらく収まる気がしない。

「あつ……。いや。これは、生理現象で……」

「ごめんなさい。あんなに歩いたの、私、初めてで……。足、痛めちやったみたいで……」

クラースは俺の弁明には触れず、視線を泳がせて言い訳をする。その表情に、俺はぐつと来てしまった。

まだかすかに湿っている髪が、とても艶っぽい。俺の心臓が高鳴る。高鳴りが、抑えられない。

「なあ、クラース……」

「はい……っ？」

か細い声で、遠慮がちな目で、クラースが俺を見る。

「……クラースは、さあ。俺の鼻筋って、言っただけど……」

俺はそうクラースに近づく。クラースが恥ずかしそうに肩をすぼめる。

「俺は、クラースが俺の鼻筋だって、言っただけで。俺のこと、好きだっって言っただけで。すごい、嬉しかった」

「……」

「クラースはさ。俺と……」

艶のある黒髪。伏せられた大きな瞳。桜色の唇。やわらかそうな白い頬。

距離がどんどん縮まっっていく。

「……………っ、ごめんなさい！」

「えっ?」

クラースの予想外の反応に、俺は面食らって硬直する。

「あのっ! そのっ……………、私……………。今日、血い出ちやうから。その。そういうことは、出来ないんです。ごめんなさい。その、助けて頂いたのに……………」

早まったかとさーっつと血の気が引きかけていた俺は、そういうことかと一安心してクラースに尋ねる。

「血が出るって、怪我でもしたのか?」

俺はカエリオニとの戦闘の時、クラースのことをやむを得ず突き飛ばしてかばってやったことを思い出す。

さつきは、あんなに歩いたのが初めてだったから足を痛めたと言っていたが、もしかするとあの時に怪我でもしていたのかもしれない。それは、仕方なかったとはいえ馬鹿なことをしたなと思った。

「……………? ちっ、違います!」

ぽかんと俺を見ていたクラースはしかし、そう言っ慌てて否定する。

「そうじゃなくて。あの……………。毎月の……………、ことなので……………。大丈夫です。でも、そういうことはできないんです。ごめんなさい」

「ああ」

——月経か。

クラースの言葉で俺はすぐに理解した。月経は呪術にも関係してくることだから、俺は詳しいんだ。

月経中だっ別にできないことはないんだけど、かなり血で汚れるから、クラースも恥ずかしいだろうしやめておくかと俺は思った。処女ならどうせ血が出るし、俺は気にしないんだけどな。まあ、今日はそういう気分じゃないんだろう。

クラースに迫っていた俺は体を起こし、床に座り込んだ。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。気まずい……。

「あつ、あのさー！」

「はっ、はい！… なんででしょう?!」

俺はこの際だしと思つて、気まずい沈黙を破るついでに、ずっと気になつていたことを訊きいておこうと思つた。

「これは、友達の話なんだけどさあ」

「はあ……」

「あの。俺と知り合つた、仲いい、友達の話なんだけどさあ。そいつ、何か実はまだ童貞らしくてさあ。はは。それ、気にしててさ。いや、女の子つてやっぱ男には経験豊富であつて欲しいのかな、っていうかさ。色々手ほどきして欲しいのになつて気にしてたからさ。どうなのかなと思つて。女の子的に……。いや、あくまで友達の話なんだけど、ほら。女の子はどう思つてるのかなつて、訊いといてやりたくてさ。ほら。俺は、先輩として……」

俺はきよろきよろしながらそこまで言うと、やけに静かなクラースを見ようとした。でも、クラースの顔を直視できない

「……私は、好きな人が私が初めてだったら、嬉しいです」

「へ?」

予想外の言葉に、俺はクラースの顔を見る。

その顔はとても優しく、切なげにどこかを見つめていた。畳の上
に視線を落としているようで、それでいて、どこか遠くを見ているよ
うだった。

「こんなこと思うのは、はしたないのかもしれないけど……。私は、好きな人の全部が欲しいなつて。私のものになればいいのに、つて思つちやうから。彼の初めてが私だったら。そういうのは、私とだけだったら。うれしいなつて、思つちやいます……」

「……」

予想外の言葉に俺は驚いてクラースを見つめる。

「なっ、何言つてるんでしようね私。うな重でしたよね? 待つててください! 今急いで買つて来ますから!」

クラースはそう言うのとそそくさと立ち上がり、風のような速さで家

を出て言った。

「……そういう、もんか」

俺は童貞でよかったと思った。

第6話 「口にできない人參の桂剥き」

俺はクラースが眠っているのを確認すると、そーつと音をたてないように家を出た。ぼろい戸はどうしても音が鳴ってしょうがない。

クラースの家に泊まってから、なんだかんだで七日が経った。

世間では予想通り、俺は黄泉蔵を探索中に事故で死んだことになっている。

クラースには、カチカチの存続に関わる重要な任務のため、俺は死んだことにして隠密活動をしていると言っている。両親もまだ帰らないらしいし、もうしばらくはなんとかなるだろう。

それよりもだ。ルクスのヤツ、俺のことを殺しておいて——実際には生きているのだが——不幸な事故だったなどと言っているのも許せないが、揚げ句あいつは目を疑うような報告をしたのだ。

なんと、ルクスとルチアが結婚するというのだ。その報せを読んだ時、俺は目の前が見えなくなつて気を失うかと思つた。

俺の事故死がある前から結婚する予定だったから、とても悩んで話し合つたけれど、悲しい出来事に沈み切つてしまわないよう、延期せずに結婚を決めたなどともっともらしいことが書いてあつた。

クラースの話では、国民たちも大多数は理解を示して二人を祝福しているというのだから、余計に腹が立つ。許せない。許してはならない。

そもそも、ルチアは俺のことが好きだったんだ。直接言われてはなけれど、長年一緒にいた幼馴染だ。なんとなく態度でわかつた。ルチアだけは昔からずっと、俺に優しくかつたんだ。

もしかするとルクスは、ルチアをものにするために俺を殺すことにしたのかもしれない。そう思うと、余計に許せなかつた。

ルクスめ……。ルクスめ……。許せない……。許してなるものか！

「はあっ、はあっ……」

荒くなる息を抑えて、俺は暗い夜道を星明かりだけを頼りに歩いた。

この七日、俺は何もせずただあいつらを憎んでいたのではない。今日、ついに俺は復讐の幕を、この憎しみの炎で焼き尽くし、開幕させるのだ。そのための準備は万端だ。

「ふっ、ふふふっ、ふっ。はっ」

俺はあふれる笑いを噛み殺し、ルクスたちの眠る西洋館へと向かった。

*

「……」

小高く切り立った草原くさほらから、灯りの消えた西洋館を見下ろしていた俺は振り返る。

「まさか生きていたとはなあ」

「……」

そこには、黒装束に身を包んだイグニスが立っていた。

「散々俺たちのことを嗅ぎまわっていたんだ。知っているだろう。ルクスとルチアは邪魔者のお前がいなくなって、やっと幸せになれたんだ。邪魔はさせん」

イグニスが白々しい真つ黒な建前を吐いてクナイを構える。

「やはり、直接とどめをさしておけばよかったよ。……そうだ。遺言くらいは聞いてやろうか」

「……」

「フツ。何も言うことはないか。いいだろう。死ね！」

イグニスが投げた三本のクナイは、俺の首、胸、腹に深々と突き刺さった。

「呆気な……っ？」

クナイがぼとり、ぼとりと地面に落ちる。

俺の体には傷一つない。

「やめた方がいいぞ、イグニス……」

俺はそう言うと、近くに一本だけ生えていた木の根元、その裏に隠しておいた鉄のカゴを持ち上げ、イグニスに向かって放った。

「……」

イグニスは無言でカゴに近づき、クナイを籠手に擦って火を灯す。

「ノブスマ？ 一匹は、死んでいる、のか？」

「もつとよく見てみろよ。お前の目は節穴か？」

俺に言われた通り、ノブスマをよく確認したイグニスには鼻で笑った。いちいち癩しやくに障る奴だ。

「これがどうした？ あらかたお前の悪趣味な呪い、じゃなくてデバフだったか？ ハンツ。それでお前の傷をこのノブスマに移したのだろうか？ もう一匹いるな。他にもいるのか？ 構わないさ。ものけが尽きるまでお前を殺すだけだ。ものけ退治といこうじゃないか」

そう言つてクナイの火を消したかと思うと、一瞬で両手に三本ずつクナイを出しイグニスが構える。はっ。その曲芸だけは褒めてやるよイグニスウ！

「本当にいいのかな？」

イグニスが眉をひそめるのがわかる。暗くてよく見えなくとも、お前の憎い顔は俺の脳裏にこびりついているから、手にとるように想像できるぞイグニスう。

「俺がこの数日、何もせずにいたと思うか」

そう言つて俺は足元のクナイを拾い上げ、呪いを込めて粉々に握りつぶした。

「っ……?!」

「いい顔だあ、イグニスう。なあ。俺はこれでも感謝してるんだぜ。お前たちが俺を殺そうとしてくれたお陰で、その憎しみで、恨みで、怒りで、俺はこんなに強くなれたんだからなあ、イグニスう」

俺はさらにもう一本、クナイを拾い上げて俺の力を見せてやる。思いつき。お前が俺を、雄々しい雄々しい男の子だなんて馬鹿にしやがった日々をなァ！

「ほらあ、見てみるよイグニスう。お前が馬鹿にした非力な俺はもういない。呪いの力だけでこんなことまで出来るようになったんだ」

「……だから、なんだ」

「そんなこともわからないのかあ、イグニスはあ。馬鹿だなあ。お前の頭は空っぽかあ、イグニスう。義賊なあ？ 弱い者の味方なあ？

そんなこと言われたって、所詮は盗人ぬすっとだもんなあ？ 人のものを盗るしか脳のない空っぽの泥棒があ！ 少しはそのない頭を使って自分で考えてみたらどうだ？ え？ これだけの力を手に入れて、俺が傷を移せるのが近くにいるものだけだと思うか？ なあ」

そう言つて俺はイグニスに背を向け、夜闇で塗りつぶされたここからのいい眺めを手で示した。

「カチカチには、お前と同じおんなように俺を侮辱したムカつく奴らがたくさんいたなあ……」

そう言つてから、俺はイグニスを振り返つて思わず笑いをこぼす。

「はあ〜」

「アモール……、貴様……」

「やつてみるよお、イグニスう。ほらあ。ほらあ！」

俺はそう叫ぶと足元に残る最後のクナイを拾い上げ、俺のノドをかき切つた。

「っ！」

「はあ……、いい顔だあ。でも安心しろ。まだ違う。今死んだのは、もう一匹のノブスマさ。でもなあ、そのノブスマには呪いをかけてたんだ。俺が攻撃を受けることで発動する呪いがなあ」

「っ?!」

イグニスが素早く飛び退く。その次の瞬間、巨大な拳が、一瞬前までイグニスがいた大地に打ち下ろされる。

「……ドツ、ドツ、ドコ？ カク、レン、ボ？」

「もののけ……う？」

——カエリオニだ。

わざと稚拙かつ強力な呪術を組んで、その呪いを死んでしまったノブスマに向け、カエリオニを生み出したんだ。もちろん、俺にかえつてこないように対策もしてある。あのカエリオニは、呪うべき相手を見つけるまで無差別に目の前の生物を襲う。

「お前の相手はそいつで十分だ」

「……コイツは殺していいんだな？」

「ああ？」

刹那、イグニスが素早く何本かのクナイを投げた。それらはカエリオニの周囲を囲うように投げられたかと思うと、あつという間に火柱を噴射させ、たちまち炎がカエリオニを呑み込んだ。

「で、次は——?!」

イグニスが跳ぶ。その脚を掴もうと、大地に伸びた腕が右往左往する。

「俺を馬鹿にしすぎじゃないかあ、イグニスう?」

燃え盛る炎の中で倒れていたカエリオニが、体のあちらこちらに炎を灯して立ち上がる。

「ドツ、ドツ、ドコ? ドツ、ドツ、ドコオ?」

うなるような剛腕の追撃をすんでかわしたイグニスは、クナイをカエリオニの心臓めがけて突き出す。パキツと虚しく音を立ててクナイが折れ、イグニスは素早く飛び退き次の一撃をかわした。

「ははは。頑張るねえ、イグニスう」

「チツ……」

「ああ?!」

俺はイグニスの舌打ちに怒りが爆発しかけ、危うく一瞬で呪い殺してしまいそうになった。いけない、いけない。もっと楽しまなくちやあなあ、俺……。

俺は懐から五本の五寸人参を出し、イグニスがクナイを持つみたいに見てみた。意外と難しい、くそっ! 練習ではもっと上手く出来たのに。くそっ!

「なあ、イグニスう。見えるかほらあ。人参だあ」

「くっ! ……それがどうした!」

カエリオニの猛攻をかわしながら、イグニスが答える。

「俺も鬼じゃない。だからイグニス。お前にも可能性をくれてやろうと思つてなあ」

そう言うと、俺は四本の五寸人参を懐に戻し、換わりに一本の包丁を取り出した。

そして、包丁を使って人参の皮を剥き始めた。

「ぐっ?! つ……、あつ! つつ……!」

イグニスの表情が突然、苦痛に歪む。

「なあ、イグニス。俺はこれからこの五本の人参を順に桂剥きしていく。全部剥き切るまでお前が一度も叫び声を上げなければ、俺はお前たちを今日のところは見逃してやろう」

俺はそう言いながら、まずは一本目の五寸人参の皮をうすく剥いていく。料理なんてしたことなかったが、元から手先は器用な方だし、ここ数日毎日練習したので、なかなか綺麗に剥けている。

「つうう……い……はあはあ、あああつ……い……」

イグニスが苦しそうだ。

それもそうだろう。この五本の五寸人参はそれぞれ、イグニスの四肢、そしてちんこと連動している。

俺がこの五寸人参を桂剥きしていくと、イグニスの腕、そして脚、最後にはちんこがそれぞれの人参そっくりに桂剥きされていくのだ。

黒装束で肉が剥けていく様が見えないのが残念だが、まあいい。あの表情だけで十分だ。

「どうしたー、イグニスー？ ずいぶん辛そうじゃないかあー。もう、降参するかあ？ 叫んだら、楽に死なせてやるぞおー？」

「……っ！ ……っ、……っ！ ……っ！ ……っ！」

「無視すんじやねえよおー」

俺は五寸人参を切らないように気をつけて、刃を立て傷つける。

「っあ……い……」

「ふっ、ふふふ……」

俺はゆっくりじっくり五寸人参を桂剥きしていく。

まだまだ夜は長い。

「せいぜい楽しませてくれよ。雄々しい雄々しいイグニス君」

俺は草の上に座り込むと、いつの間にか集まってきた漆黒の鳥たちを観客に、楽しい楽しいお料理を楽しんだ。

*

——翌日。

カチカチの外れにある丘の上で、一人の男の死体が発見された。

男は有名な元義賊であり、現在はルクスらと組んでいる黄泉蔵夫の

イグニス。

その死体はむごたらしく、到底口にすることも出来ない有様だった。

第7話 「しん中の毒」

「ごちそうさま……」

朝餉あさげをほとんど残して俺は立ち上がる。

「アモールさん、どうしたんですか？　ほとんど食べてないじゃないですか」

「ああ。ちよつと食欲なくてな……」

吐き気をこらえて外の空気を吸いに行こうとする俺を、クラススが引き止めるように喋り続ける。

「大丈夫ですか?!　もしかして何かご病気では?!　どうしま」

「大丈夫だ!」

思わず俺は声を荒げてしまった。

「……ごめん、なさい」

立ち上がりかけていたのだろうか。衣擦きぬずれの音と共にクラススが大人しくなる。

「ちよつと外の空気を吸って来る」

「はい。お気をつけて」

何事もなかったかのようなクラスの明るい声に見送られて、俺は家を出た。

俺は人目を避けるように、すぐそばの木々の中へと入っていく。大丈夫、ここまですどこにも人気ひとけはなかった。

「はあ……」

俺は倒木の上に腰掛けて、遠く木々の隙間に視線を放る。

昨日、結局イグニスは一度も悲鳴を上げることなく、両腕を失う前にはカエリオニさえも倒してしまったので、俺は用意していった五寸人参をすべて綺麗に桂剥きすることができた。

俺は、四肢の肉とちんこを失って何もできなくなったイグニスを約束通り見逃してやったが、あの状態ではもうとっくに死んでいるだろう。

最初の復讐が終わった――。

イグニスとは、カチカチのある権力者共と対立した時に出会った。

そいつらはある時、俺たちの名声を利用して民からの威光を得ようと目論み、俺たちに手を組まないかと持ちかけてきた。だが、ヤツらの悪名を聞いていた俺たちは当然断り、それに腹を立てたヤツらと対立することになったのだ。

そんな戦いの中で俺たちはたまたまイグニスと共闘することになり、最終的に俺たちは悪名高いヤツらを失脚させることに成功した。しかし、その時に素性が晒されてしまったイグニスは、それまでに多くの権力者たちから恨みを買っていたため、カチカチを去ることを余儀なくされたのである。

そんなイグニスの実力を認めた俺たちは、俺たちの威光で保護する形でイグニスを仲間に迎え入れようとした。

最初は頑なに拒んでいたイグニスだったが、ルクスとルチアの熱心な勧誘に折れ、最終的には俺たちの仲間になった。

だというのに……。

だというのに！

その恩を忘れて、イグニスは次第に増長していったんだ。俺を露骨に見下すようになった！

特に近頃は、何かにつけてひ弱な俺のことを「雄々しい雄々しい男の子」などと馬鹿にしゃがって！

だからア！

だから、そんなイグニスをいたぶって殺してやったあの時は最っ高な気分だった。

あいつのことだ。どんな痛みにも耐え抜いて、最後まで悲鳴を上げずに俺の復讐を受けきってくれるだろうと信じていた。

そして予想通り、イグニスは最後まで悲鳴を上げず、痛みで死ぬことも気を失うこともなく耐え抜いてくれた。

苦痛に耐えるあいつの表情に俺は胸がすく思いで、あんなに可笑しくて可笑しくて、俺は抱腹絶倒の快感に身をよじりながら、練習に練習を重ねた桂剥きを披露してやった。

でも。でも……。

その帰り道、急に興奮が冷めた俺は、突然耐え難い吐き気に襲われ

たんだ。

血でぐっしよりと濡れた黒装束に包まれて見えなかったはずの、イグニスの桂剥きにされた四肢とちんこが俺の脳裏に浮かんで、俺は耐えがたい吐き気に襲われた。

そんなものは。無残に殺された人間の死体なんて、黄泉蔵では日常的に見てきたはずなのに。むごたらしいもののけたちの死体だって、何も感じなくなるほどに見てきたはずなのに。

俺はなぜだか、イグニスの、その死体を想像すると、言いようのない吐き気に襲われて、途轍もない何か言葉に出来ないものに全身を苛まれるのだ。

「はあっ！ はあっ！」

俺は息荒く地面を見下ろし息を吐いた。

吐き気が止まらない。止まれ。止まれ。

「はあっ！ はあっ！ はあっ！」

止まれ。止まれ。止まれ。止まれ！

「止まってくれ……。止まってくれえ……」

俺は声にならない息のような声を吐き出し、地面に目を走らせた。

「イグニス……。イグニスう……。い！」

死んでまであいつは俺を苦しめるのか……！

おのれ。イグニス。イグニスう！

「っ！」

俺は怨念を込めて地面を殴りつける。

大地は嘘みたいに脆く、まるで豆腐のように砕け散った。

「はあ……。はあ……」

俺は荒い呼吸を落ち着かせる。

「……待っているお、ルクス。次はお前だ。ルクス……。ルクスう……。い！」

眩きで叫び、俺は立ち上がった。

俺の胸に渦巻く怨念が、俺の吐き気を嘘のように晴らしてくれる。

ルクスを殺せば、俺はもう苦しむこともなくなるだろう。

「ふっ……」

俺は笑いを漏らし立ち上がる。

「ふふっ、ふっ……。ふふふふふふ……。ふははははははは」
家に戻るとクラスがお湯を沸かしていた。

「アモールさん、大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だ」

「よかったです。朝餉はどうしましょう？」

「食うよ」

「はい！」

元氣よく返事をする、クラスは蠅帳はえちよう* から俺が残した食事を
出してきた。

「気分がよくなったら、急に腹が減ってきたよ」

「それはよかったです！ もう、安心ですね。そうだ！ ちよつと
待っててくださいね」

嬉しそうにそう言ったクラスは勝手に戻ると、しばらくして湯気
の立ち上る湯呑のぼを持って戻って来た。

「おっ、なんだ？」

「これ、私がお腹を壊した時とか、よく母かあさまが淹いれてくれたんです。
よかったら」

そう言っただけでクラスが俺の前にごとりと置いた湯呑の底を見て、俺
は目を丸くした。

「……」

「アモールさん？」

白い湯気の奥、湯呑の中、ゆらゆらと揺れる赤く崩れたびらびらの
皮と舞い散る果肉片。俺は見たこともない光景を瞬く間に想起させ
られ、思わずその場で胸に蘇ったムカつきをぶちまけた。

第8話 「胸に残る温度」

「……」

夜の帳もすっかり下りた夜更け。

俺は、窓から入ってくる月明りで照らされたクラースの寝顔を見ていた。

「……」

静かに眠るクラースの目じりは濡れていた。

いつも笑顔のクラースだが、まだほんの少女だし、両親も留守で本当は寂しいのだろう。大好きなお姉さんも、死んでしまったばかりだし……。

「クラース……」

俺は彼女の枕元に、摘んできた花を添える。

昼間は流石に悪いことをしてしまったので、せめてものお詫びにと花を摘んできたのだ。今の俺にはあまり金の余裕がないし、クラースの喜びそうな物がイマイチわからない。

「……」

俺は急に、クラースが愛おしくて仕方がなくなった。

もう月経は終わってるんじゃないだろうか？

まだだったとしても、そもそも接吻せつぶんくらいならしても平気だったじゃないか。

「……んん」

「っー」

急に寝返りをうったクラースから、俺は離れて様子をうかがう。

……よかった。起きてはいないようだ。

接吻は帰ってから取っておこう。クラースの照れる表情も見たいし、初めての接吻が寝ている間だなんて、流石に味気ない。

全部終わらせて、ルチアとの関係も決着をつけてからにしようと思は決めた。一つ、楽しみが出来た。

「いってくるからな、クラース……」

俺は起こしてしまわないように優しく囁くと、家を出た。

「今晚で全ての決着がつく。
そうしたら、その後、俺はどうしようか――。」

＊

ルクスとルチアと過ごした幼少時代を振り返っていたら、二人の住む西洋館にはすぐに着いた。

「ルクス……。ルチア……！」

思えば俺はずっと一人だった。幼い頃から体が弱くて顔もかっこよくはないから、みんなに馬鹿にされて相手にして貰えなかった。

そんな俺と遊んでくれたのは、あの二人だけだった。

大きくなってからも、俺を黄泉蔵夫に誘ってくれて……。

最初は、褒めてくれてたじゃないか。そんな二人に並ぶため、俺はあんなに頑張った。呪術なんて趣味が悪いとか陰口たたかれたって、二人が褒めてくれるから。何のとりえもなかった俺の初めてのとりえだったから。嬉しくて、嬉しくて。それで……。それで……。

「なあ――」

いつから。いつから変わっちゃまったんだ？

俺たちはいつから……。

「ふっ」

なんて、何を感傷的になっているんだろうな、俺は。

これからルクスを殺すのに。

俺を事故に見せかけて殺そうとしたばかりか、ルチアまで奪いやがって。

絶対に、絶対に許さない。

表じやいい顔していたが、あいつの俺に対する態度はとつくに冷え切っていた。もう、ずっとだ。

許さない。許さないぞルクス。許さない。殺してやる。殺してやる。殺してやる。

ルチアもルチアだ。

あんなヤツと結婚だなんて。

なんで。なんでだルチア。

ルチアが優しいのは、愛情深いのは、知ってるけど……。

だからって！

……思えばあの日、ルチアは俺のことをずっと心配そうに見てたよな。

優しいから、遠慮しちゃうから、言い出せなかったんだよな？ 男二人に、力じや勝てないルチアじゃ従うしかなかったんだよな？ 怖かったんだよな？

それはわかるよ。わかるけど。でも。でも……！

「はあっ！ はあっ！」

俺は荒くなる息を抑えて、見慣れた、だけど懐かしい西洋館の戸を見据えた。

「待っている、ルチア。ルクス……。殺してやる。殺してやるからなルクスウ！」

俺は激しく沸騰する囁きで宣誓し、煮えくり返るはらわたを抑えるようにゆっくりと歩き出した。

*

西洋館はしんと静まりかえっていて、警護の者一人いなかった。

イグニスが惨殺された直後だ。もう少し警戒されていることを予想していた俺は、なんだか拍子抜けだった。

「……」

あつという間にルクスの部屋の前に着いた俺は、意を決して洋式の戸を開けた。

「ぬあっ?!」

突然、暗い部屋の灯りがついて俺は声を上げる。

「待っていたよ、アモール」

ルクスが部屋の奥、正面にある机の前に立っていた。帯刀している。

「ルクスう……」

「まさか君が生きていたとはね。昨晚、イグニスを殺したのは君だね」
刀に手をかけたルクスと言う。

「ああ、そうだ……。ルクス。次はお前の番だ」

「……そうか。なあ、アモール。すまなかった」

「はっ！」

「今さらこんなことを言っても遅いのはわかってる。でも、言わせてくれ。すまなかつた……」

ルクスは本当にすまなきそうにそう言った。刀に手を掛けたまま。その声も表情も名演技だが、白々しいにもほどがある。二枚目の大根役者が！

「何を今さら。そんなこと言われたってもう遅いんだよオ！ お前らは俺を殺そうとした！ その事実は変わらない！ 俺はお前たちを許さない！ 絶対に絶対に殺してやる！ 今更命乞いをしたって」

「そんなつもりはないよ、アモール」
「アア?!」

俺は言葉を遮られ、思わず一念で殺してしまうところだった。危ない危ない。ルクスもイグニスと同じように、苦しませて苦しませて殺してやるのだ。

俺は気持ちを落ち着ける。だが、ルクスはそれを逆なでする。

「命乞いなんてするつもりはない。ただ、もう少しちゃんと君と向き合っていれば、こんなことにはならなかったのかなって。そう思ってるんだ」

「だからなんだ……?!」

「ほんとうにすまなかつた、アモール。これは当然の報いだと思ってる。でも！ これ以上君の手を罪に染めるわけにはいかない」

そう言ってルクスは刀を抜いた。

「僕には守るべきものもある！ 罪を負ってでも……！ だからアモール。君は、ここで僕が斬る！ 責任をもつて。その罪も負って……！」

「はっ、はっ、はっ……。かっこいいなあ、ルクスくんはあ。何を言ってもかっこよく見えるよ。流石は勇者、閃光のルクスウ！」

皮肉で讚えてやった俺と、ルクスは瞬く間に距離を詰め、その刀を振り下ろした。

俺はそれを右手で掴み、受け止める。もちろんルクスの刀は俺の手を深く切り裂いたが、傷は次の瞬間、次の瞬間――。

「あああーっ！」

俺は叫んで手首を抑えた。何故だ！ 傷が！ 移らない！
綺麗に裂けた手の平から、どくどくと血があふれ出す。

「イグニスが教えてくれたんだ」

「アアー?!」

「君の手の内をね」

「なっ、何を言ってる！ イグニスはっ。イグニスは死んだはずじゃー！」
「ああ、君に殺されたよ。でもね。イグニスは犠牲になってまで、僕たちに教えてくれたんだ」

「どっ、どういうことだ！」

俺は懐から出した包丁で自分の袖を裂き、それで右手を止血する。
どう呪っても、傷が移らないのだ。どうなっている！

「鳥だよ」

「鳥い?! ……っ?!」

俺は気づく。夕べ、桂剥きをしていた時、鳥が集まってきていたことを。

あれはイグニスの死の臭いを嗅ぎつけ、死肉を狙って寄って来ていたのだとばかり思っていたが。そういえば、あいつは諜報活動に動物を使っていた。特に、鳥！

俺たちは人を相手に戦うことなんてほぼないから忘れていたが。
イグニスは義賊時代から育てていた、いくつかの言葉を覚えて使いこなせる鳥を可愛がっていた。まさかそれで?!

いや、そこまで鳥に出来るのか？ 単にあの戦いの中、なんらかの言伝ことづつてを作って、鳥に回収させ運ばせたのか？ なんにせよ――。

「気づいたみたいだね。そう、鳥を使って君がイグニスをどうやって殺したのか、その手の内を教えてくれたんだ。だから、僕とルチアの部屋にはあらかじめ、呪術を封じる仕掛けが施してある。内々ないないに、カチカチ中から腕利きの呪術師たちに集まって貰ったんだ。急だったにもかかわらず、今日の日暮れには間に合わせてくれたよ……」

「イグニスう……、ルクスウ！ 貴様らアー！」

叫ぶ俺の左肩辺りをルクスが斬る。

「うああーっ！」

二の腕から血が溢れる。

「痛いだろ、アモール。イグニスは……、イグニスはもつと痛かったはずだ」

「ルクス。ルクスウー！」

俺は壁際を後ずさりルクスから離れようとするが、そんなことではろくに距離が取れない。

なんでだ？　なんでだ？　なんで俺がこんな。こんな……。

「アモール。君は少し、他人の痛みを知るべきだった……」

「なっ……！」

何を言ってるんだルクスは。

……それは。それは。それは！

「それは俺の言葉だア！」

恨みの限り叫んだ瞬間、部屋の灯りが消えた。

「なっ！　うあっ！」

暗闇の中にルクスの呻きが響く。

「ふっ、ふふふ……」

俺の手の平から痛みは消え、俺の二の腕から痛みは消え、俺の胸は空いていた。

「鬼才の呪術師、アモール。そう謳われたこの俺が。もののけだ鬼だともて揶揄されたこの俺があ。カチカチ最強の呪術師だったこの俺があ！　お前たちへの憎しみで無敵となったこの俺がア！　凡才の呪術師共をいくら集めてきたところで、止められるはずないだろお？

アアア？！」

「アモ……ルク……」

暗闇で見えないルクスを俺は睨み、手をかぎした。

「もういい、ルクス。死ぬ。……うわっ！」

俺の体に何かが覆いかぶさってきた。

足元に刀の落ちる音がした。

ルクスだ。ルクスは暗闇の中、最後の足掻きで俺を殺そうとしていたのだ。

「馬鹿だなあ。切ったところで自分に返るだけなのに」

ずるつと床に落ちたルクスの死体を、呪いを込めた足で蹴り飛ばし、俺はルクスが触れた胸を払った。強く、こびりついた汚れを払い落とすように払った。

でも、ほんの少し触れただけのルクスの体温が消えない。あたたかな、死んだばかりのルクスの体温が、払っても払ってもとれなかった。「くそっ！」

俺は足元のルクスを蹴飛ばそうとしたが、そこにはもうルクスの死体はなかった。

呪いを込めた脚力で蹴り飛ばしたルクスは、もっと遠くへ飛んでいったのだろう。暗くて何も見えない。

俺が最後に、ルチアに会いに行こうと出口を求めたその時、急に扉が開いて、小さな西洋風行燈あんどんの灯りが見えた――。

第9話 「ほうふくぜつとうのこくはく」

俺が最後に、ルチアに会いに行こうと出口を求めたその時、急に扉が開いて、小さな西洋風行燈の灯りが見えた――。

「ルクス……？」

ルチアだ！

「ルチア―！」

叫ぶ俺には目もくれず、ルチアは机の前のルクスのもとへ駆け寄った。俺が入ってきた時もそこにいたルクスは、ただもう息をしていなかった。

「ルクス！　ねえ、ルクス―！」

行燈を床に置き、ルチアはルクスの顔に触れた。

「ルチア。ルクスはもう死んでるよ」

「……。お願い、ルクス！　死なないで、ルクス―！」

ルチアが陰陽術とは名ばかりの、西洋から入ってきたまが紛い物の術でルクスを生き返らせようと懸命に祈る。

でも、無駄だ。確かにルチアなら、止まったばかりの心臓の動きだって蘇生させられる。でも、問答無用の俺の呪いで絶命したルクスはもう、そんなものでは助からない。どうしたって助からないよ、ルチア。優しいルチア。優しすぎるルチア。

「なあ、もう無理だよルチア」

「貴方は黙ってて！　ルクス！　ルクス！　お願い！　お願いだから」

「ルチアア―！」

びくつとルチアが肩を震わせ、俺を見る。

「もういいだろ、ルチア。そんな奴。なあ、ルチア。俺はわかっているよ、ルチア。お前が本当は俺のことを殺したくなかったのを。ルクスとイグニスには逆らえなかったんだろ？　だから、安心しろルチア。優しいルチア。ルクスに守ってなんか貰わなかったって、ルチアのことを俺は殺さない」

「アモール……」

俺の頬がゆるむ。

「ああ、ルチア」

強張った表情でルチアが呟く。

「貴方……」

「ああ、ルチア。大丈夫。怖かったよなあ？ でも大丈夫だ。ルチアのことももちろん許せない。一言相談してくればよかったのと思う。でも、殺しはしないよ。大丈夫。ルチアの気持ちはちゃんとわかってるから……」

「私の、気持ち……?」

「ああ。ルチア、俺のことが好きだっただろう?」

「……」

ルチアは何も答えず、ゆっくりと立ち上がった。

暗い部屋で、灯りを背に足元にして立っているルチアの表情はよく見えない。どんな表情をしているのだろう。

こんな状況だ。照れていたりはしないかもしれない。でも、それでいいんだ。

俺を好きなルチアへの復讐は、俺に殺されることじゃない。俺に思いを受け入れて貰えないことだ。

さあ、ルチア。俺に告白しておくれ。かわいそうなルチア!

「……アモール。……貴方は、やっぱりそう思っていたのね」

「……」

ルチアが勢いよく息を吐き出すみたいに言った。

「……私は貴方のことが、こわかったの」

「?」

「私は貴方のことがこわかったのよ。気持ちが悪かったの。好きじゃないわ、貴方のこと。もちろん、友達としては愛していたわ。昔はね。ずっと一緒だったから、今だって、好きとか嫌いとか、そんな単純なものじゃない。貴方を、心の底から憎いだなんて割り切れない。でも、それでも、それ以上に、貴方のことが無理なの。駄目なのよ。貴方が」

「……」

俺はルチアが何を言っているのかよくわからなかった。

この期に及んで照れてるのか？　なあ、ルチア。そんな、そんな、何を言ってるんだルチア。

「貴方が勘違いしているのはわかってた。私も、もっと早くにちゃんと言わなきゃだっただわね。いつしか貴方は私の体にベタベタ触るようになって……。やんわり拒否しても、貴方は私に触れてきたわよね。いつもいつも。本当に気持ちが悪かった」

「……なあ、ルチア。何を言ってる。なあ、そんな嘘は。なあ、ルチア」
「嘘じゃないわ。やめて。もう、私の名前を呼ばないで。鳥肌が立つのよ。貴方、私だけじゃないわよね。特に、自分より立場の弱い女の子には。ねえ、貴方が思うほど人の好意って単純じゃないのよ？　貴方に微笑みかけるからって、貴方に優しくするからって、貴方に触れられたいと思うわけじゃないの。私は貴方が本当に無理だったのよ。好きとか嫌いとかじゃなくて、もう、生理的に駄目だったの……」

「そんな……。だって……。ルチア……。だって、お前は俺に優しく」
「だからそういうことじゃないって言ってるじゃない！　なんでわからないの？　……。でもね、そうね。ずっと貴方と一緒にいたのに、そんな私が言えなかったのが、よくなかったのかもしれないわね。」

でも、怖かったのよ。みんなの関係に亀裂が入るのが、怖かったのよ。黄泉蔵夫として評価されて、これからって時に、そんなことで亀裂が入って、私たちがバラバラになってしまるのが怖かったのよ。悪い評判が立ってしまうことが、怖かったのよ。だから、私一人が我慢すればいい。そう思ってた。

それに、貴方のことも怖かったの。貴方はすごいわ。カチカチで一番の呪術師だと思う。才能もあって、努力もして。一度火がつけばひたすらに頑張るところ、そういうところは尊敬してたのよ？　ずっと……。

でもね。だからこそ。だからこそ、怖かったのよ。貴方のことが。貴方を拒絶したら、何をされるかって。貴方に逆恨みされたら、どうなっちゃうんだろうって。私だけじゃなくて、みんなが。ルクスが、何をされるかと思っただら……。

ルクスもイグニスも気づいてたわ。でも、私がおがままを言ってそのままにさせてたの。怖かったから。今ある大事な物がみんな貴方に壊されてしまうんじゃないかって、怖かったから。私一人が我慢すれば丸く収まるから。だから、私は大丈夫だからって、頼んだのよ。二人には何もしないでって、頼んでたの。

イグニスは納得してなかった。雄々しい雄々しい男の子だなんて言っただけ、いつか貴方が気づくんじやないかと思っただけ。そんな察しの良さがあれば、そもそもこんなことにはなっただけ。ね。

でもね、もう限界だったの。ルクスも、私と同じで、ずっと一緒に育った貴方を、ただ憎むことは出来なかったけど。それでも、貴方を憎んだ。私たち、ずっと関係があつたのよ？ 気づいてた？ 気づくわけないわよね？」

「……ああ。ああ。ルッ、ルチア。ルチア。あつ、あああ。ああ！ やめ、やめてくれ。もう……、もう！」

「やめないわ！ 知るべきなのよ。もう遅いかもしれないけど、知るべきなのよ。貴方は。そして私も、言うべきだったの。言うべきなのよ。」

ねえ、私とルクスはそういう仲だったの。それで、黄泉蔵夫としても軌道に乗っているし、支えてくれるイグニスもいる。だから、そろそろ結婚したかったのよ。

でも、そんなことをしたら貴方が逆恨みすることは明白だった。貴方に一度火がついたら、やり切るまで止まらないのはわかってたわ。私たちがみんな殺されるか、貴方を殺すまで、貴方は止まらない。そうになったら、貴方一人の犠牲ではきつと済まなかった。貴方が生きている限り、私たちは幸せを望めなかった。

もう、どうしようもなかったのよ。ここまで貴方を増長させてしまったのは私たちだわ。もっと早くに向き合っていれば、少なくともこんなことにはならなかった。だから、私たちに。ううん、私に罪がなかったなんて言わない。

でも、もうそれ以外になかったのよ」

「……」

俺は、俺は、俺は、俺は、

「だからあの日、私たちは貴方を事故に見せかけて殺すことにしたの。わざと少ない装備で奥まで入って。——貴方、何も不審に思わなかった？　そうよね？　最近の貴方は非力なのを言い訳にして、荷物の一つも持たないし、状況把握だつて心配になるくらい人任せで……。——それで、緊迫した状況に乗じて貴方を前線まで走らせたの。」

直接手は、下せなかった。イグニスはやると言っただけど、私たちが止めたの。イグニスなら、もし貴方の死体が発見されても事故に見せかけられるようにとどめをさせたでしょうけど、そうじゃなかった。そういうことじゃなかった。それは、それだけは嫌だったの。

どうせ罪は変わらないのに。ううん、そんな風に直接手にかけることから逃れようとする方が、もっと罪深いのに。それでも私たちは、嫌だったのよ。それが間違いだつたわね。これは、報い、なのかもしれないわ。

ねえ、知ってる？　呪いって、小さな子供が家に帰るように、呪つた人のもとへかえるんですって。本当に、その通りだわ」

「……」

何も言えない俺のもとにルチアはやってくると、足元に落ちていたルクスの刀を拾った。

「……ルチ、ア？」

「安心して。貴方を殺す気はないから。殺したいくらい、殺したいくらいだけどつ……。私に貴方を殺すことが出来ないのは、わかってるから……」

そう言うと、ルチアは俺に背を向けてルクスのもとに戻った。

「待って、くれよ。ルチ、ア……」

「さようなら」

ルチアはそう言うと、床に寝ているルクスの横に膝をついた。

「ルクス、愛してるわ」

そうやってルチアはルクスを抱きしめ、その唇に唇を重ねた後、刀で自分のノドを突いた。

「……ルチアあ！」

しばらく呆然としていた俺は、叫びと共に再び動き出してルチアに駆け寄る。

「ルチア！ ルチアあ！」

その肩を掴み、振り向かせ、激しく揺さぶる。

まだあたたかいルチアの頭が力なく、激しく揺れる。

「ルチアあ！ ルチアあ！ 死なないでくれよ！ ルチア！ ルチアあ！
！ なあ、死なないでくれよ！ ルチアあ！ ルチアあ！」

俺は泣きじやくりながらルチアを揺さぶったが、ルチアは起きなかつた。

俺は、はっとなって呪いでルチアの傷をルクスに移そうとしたが、その傷は移動しない。

「なんでだ！ なんでだよお！」

叫んだ俺は、はっと気づく。ルチアが何か呪いを無効にする物を身につけているのかもしれない。衣服を脱がそうかと思ったが、そんな間も惜しいので俺は強く呪った。ルチアをこんな目に合わせた全てを、ルチアへの呪術を阻む全てを強く呪った。

ルチアの首の傷が、ルクスに移る。

「ルチアっ！」

それでも、ルチアの止まった息は吹き返さなかつた。

「ルチアあ！ なんでだよお！ ルチアあ！」

—— どれほど泣き叫んだだろうか。

俺はふと、我に返った。

薄暗い部屋で、俺は座り込んだまま、静かに声をならべていった。「ルチアも、俺を殺そうとした……。だから、俺はルチアも殺した。自分から死ぬように、追い詰めたんだ。そうだ、これは復讐だ。ははっ……はっ……はっ……」

俺の淡々とした声が聞こえる。

俺は、笑っている。

そうだ、笑っている。

笑っている、は、可笑しいんだ。

俺は、可笑い。

「ははっ、はっ、はっ。ははっ、ははっ、ははははっ。ははははははっ。はははは
はははは！ はははははははははは！ はははははははははは！」
おれはなにがおかしいのかよくわからないけれど、わらいころげて
ゆかをころげまわってわらっていた。

「はははははははははははは！ はははははははははは！ はははははははは
は！」

ほうぶくぜっとう、おれはおかしかった！

第10話 「 」

家に帰ると、まだ日は昇っていないというのにクラースが起きていた。

「アモールさん。なんだか眠れな……」

振り向いたクラースが、血相を変えて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか！ その血！」

「ああ、呪いで移したから、俺にもう怪我はないよ」

それに、後から西洋館に攻め込んできた奴らも、道中で会った奴らも全員呪い殺した。ここに追手が来ることはないだろう。いや、なんだったら見つかったって、呪い殺せるし傷も相手に移る。俺は無敵だから大丈夫だ。

「そう、ですか……」

「ああ。それより」

「あの！」

俺の言葉を遮って、クラースが言う。本当に、クラースは人の話を聞かないところがある。まあ、そういうところも可愛いんだけど。

「なんだ、クラース」

「あの……。変なこと、言ってもいいですか？ 違ったら、笑ってくださいって構わないので。趣味の悪い、つまらない冗談だなんて」

俺の返事を待たずに、クラースは続きを言う。

「昨日、イグニスさんが、殺されましたよね……。あれ、アモールさんがやったんじゃないんですか？ 昨日も、夜遅くにどこかへ行つてらっしゃったし……。それに昨日、あれ？ 昨日？ どっちも昨日？ まあいいや。とにかく、昨日のアモールさん、なんだか様子が変わりましたし……」

「クラース……」

クラースは俺の目を見て、悲しそうに、だけど笑った。

「言いましたよね？ 私は、アモールさんの鼻筋だって。だから、私はアモールさんの味方です。たとえ、何があつても、私はアモールさんの味方ですから。だから、本当のことを教えてください。私にだけ

は、本当のことを……」

クラースは無理に笑顔を作ってるけど、もう泣き出しそうだった。だから俺は、言っちゃった。

「ああ、そうだ。クラース。俺は昨晚、イグニスを殺した。そして今日も、ルクスとルチアに復讐したんだ。ルチアはもういない。昔の女はもう死んだ。俺が殺したんだ。あいつら、俺を裏切って殺そうとしたから。事故に見せかけて、黄泉蔵で殺されかけたんだ俺は。だから、俺は三人を殺した。俺は復讐のために、あいつらを殺したんだ……。俺は、俺は……」

俺は膝をついた。

「はあっ！ はあっ！」

「アモールさん?!」

嫌だ、嫌だ。何か思い出したくないものが。

いや、わかってるんだ。俺は、俺は！

俺は、嫌だ、俺は、俺は、違う、俺は、俺は、俺は、俺は、

「アモールさん！」

俺の前にしゃがみこんだクラースの声が、俺を呼び戻す。

顔を上げた俺に、クラースは優しく、力強く言った。

「アモールさん。やり直せますよ、アモールさんなら。アモールさんはすごい人だし、カチカチではもう暮らせないかもしれないけど。どこか遠くへ行けば。誰もアモールさんを知らない、どこか遠くの国へ行けば、そこで暮らしていただけますよ」

「でも。いや、俺は」

言葉が上手く出てこない俺に、クラースは優しく切なげに微笑んだ。

「アモールさん。私も、なんです」

「？」

「私も、人を殺したんです」

「……」

クラース？

「覚えてますか？ 私がアモールさんと初めて会った時のこと。ア

モールさんに助けて貰った時、私を騙してたおじさんたちが死んでないかなんて聞いたのを。アモールさんは、私がいい子だって、思ってくれました？ でも、ごめんなさい。違うんです。私、悪い子なんです。私、お姉ちゃんも。ソールイエンズも。ソールイエンズのこと、殺しちゃったから……」

ぽつり、ぽつりと、クラースは涙をこぼし始めた。

「だから、だから、もう嫌だったんです。私のせいで、誰かが死ぬのは。もう、嫌だったんです。だから、あんなこと聞いたんですよ？」

「クラース……」

クラースの瞳が、涙でゆらゆらと揺れているようだった。

「アモールさんは、覚えてますか？ お姉ちゃんの話。私、あの日。お姉ちゃんが黄泉蔵に行つたつきり帰つてこなかったあの日。お姉ちゃんに渡した手ぬぐいに、呪いをかけてたんです」

「……」

俺は予想外の言葉に、あつけに取られてクラースから目をそらせない。

「お姉ちゃんは、なんでも持っていました。頭もよくて、男の子にだって喧嘩で負けないくらい強くって、そんな才能があるのに努力家で、なのにそれを鼻にかけないし、誰にでも優しくって、いつも笑顔で、おまけにとつても美人。黄泉蔵夫としてもすつごく強くって。朝焼けのアウローラって、アモールさんも聞いたことありませんか？」

「朝焼けの、アウローラ……」

確かに、聞いたことがある。まさかそのアウローラだとは思わなかったが、そういえばしばらく前に行方不明になっていたと思う。黄泉蔵夫は危険な仕事だから、有名な者でも比較的によく死ぬ。だから、そんなによく覚えていなかったが……。

「だから、私。お姉ちゃんに嫉妬してたんです。もちろん、本当に好きでしたよ?! でも、お姉ちゃんのことには本当に好きだったけど、だけど、嫉妬してたんです。」

だからですかね？ 私がアモールさんに憧れてたのは。人気はルクスさんとかルチアさんたちには劣るけど。それでも、心無い人たち

に陰口を言われても、ひたすらに自分の道を突き進むアモールさんが、努力家で、前線に立ち続けるアモールさんが、私の希望だったのかもしれない。

みんなからすごいすごいって言われるお姉ちゃんのすぐ側で、何をやってもお姉ちゃんと比べられて、あまり褒めて貰えないことの多かった、そんな私と重ね合わせてたのかもしれないね」

「クラーズ……」

「なんて、失礼ですね！ ぐめんなさい！ アモールさんは本当にすごい人です！ 私なんかと違って、本当にすごい人……」

でも、そう、だから。アモールさんのご本にあつた呪いを、試してみたんです。ほんのいじわるのつもりだったんです。ちよつと、いじわるするつもりで。殺してしまうつもりなんて、殺してしまうつもりなんてなかったんです……」

俺は、クラーズを襲っていたカエリオニの言葉を思い出す。

——モツテルデショ？ オネエチャン。イツパイ、イツパイ——

あれは、クラーズの思いだったんだ。クラーズの呪いだったんだ。でも、じゃあ違う。

確かにあんな強力なカエリオニになったってことは、元になる呪いも強かったはずだ。素人のクラーズのことだ。よくわからずに俺の本にある呪いを試して、運悪くあんなことになってしまったんだろう。呪いが成就していれば、お姉ちゃんが死んでいた可能性はあったと思う。

でも、呪いがカエリオニになっていたってことは、呪いは成就していないのだ。つまり、恐らくクラーズはお姉ちゃんを殺していない。「なあ、クラーズ」

お前はお姉ちゃんを殺してなんかいない。そう言おうとした俺の言葉を、だけどクラーズは聞いてくれなかった。

涙をこぼしながら、クラーズは言ったんだ。

「でも、だってお姉ちゃん。なんでも持ってるのに。それなのに。ソールイエンスまで。ソールイエンスまで、お姉ちゃんのものになっちゃいそうだったから……」

「えっ?」

「私、ソールイエンスのことが好きだったんです。幼馴染のソールイエンスのことが、ずっとずっと好きだったんです。そのソールイエンスまでお姉ちゃんのものになっちゃいそうだったから。かつこ悪いところ見られちゃえつて。ちよつと、いじわるのつもりで。ほんのいたずらのつもりで。だから、だから、あんなことを……」

——ウバワ、ナイデヨ。オネエ、チャン——

俺の頭に、カエリオニの言葉が蘇る。

「ク、クラース?」

「そんなこと言ったって、もう、私がしたことは変わりませんね。私の罪は、変わらない……」

クラースはそう言つて鼻をすすりながら、手で涙を拭つた。

「私も、罪を負っています。私のこの手は汚れています。私は、人殺しです。大事な人の命を奪つた、人殺しなんです。でも、私はこの罪を背負つて生きていくから。だから、アモールさんも。アモールさんも、やり直せますよ。きつと、どこかで」

「クラース……。クラースは……。?」

「私は、誰にも言いませんよ。アモールさんのこと。聞かれても、知らないって言います。夜が明け切らない内に、逃げてください。どこか遠くに行けば、アモールさんならきつと上手くやつていけるはずですよ。父さまも母さまも、明日か明後日くらいには帰つて来てしまうと思うので……。私は、ここで、祈つてますね」

「そうじゃなくて。なあ、クラース。クラース」

俺は勢いよくクラースの肩を掴んだ。

「ひゃっ!」

「なあ、クラース。そんな顔しないでくれよ。なあ、クラース! なんで顔を背けるんだよ!」

「ごめんなさい、アモールさん……。私は、アモールさんのことが大好きです。今までも、これからも臍筋です。ずっと、ずっと。それは、変わりません。ずっと応援してます。アモールさんの味方です。でも、でも違ふんですアモールさん。私が男の人として好きなのは、

ソールイエンスだけなんです！」

「クラーズ……」

ずるつと、俺の手がクラーズの肩から落ちる。

「アモールさん……。ごめんなさい……。でも、アモールさんならアモールさんなら、きつとどこかで私よりも、ルチアさんよりもつと素敵な方と、巡り合えますよ」

「……」

「アモールさんなら、アモールさんならきつとやり直せます。だから、ね？ アモールさん」

——俺は、泣いていた。

「ごめんな、クラーズ」

俺は泣きながらクラーズを見た。

「ごめんなあクラーズう」

返事をしないクラーズを見つめて、俺は泣きじやくった。

「でも、でも俺、許せなかったんだ」

床で返事をしなくなつたクラーズに、俺は泣きながら謝つた。

「許せなかったんだよお、クラーズう。もう、許せなかったんだよお。俺、俺、もう許せなかったんだよお。ごめんなあ。ごめんなあ。なあ、許してくれよ。許してくれよクラーズう」

俺は呪い殺してしまった床のクラーズに泣きながら謝り続けた。目を開いたままのクラーズに泣きながら許しを乞い続けた。

「でも、でも、だって、お前まで、お前まで俺のこと好きじゃないって言うから。好きだって言ったのに、笑いかけてくれたのに、優しくしてくれたのに、なのに、なのに！俺のこと、違うつて。好きじゃないって言うからあ！ だからあ！ ああー！」

もう、もう嫌なんだよ。怖いんだよ。許せなかったんだよ。そんなの、そんなの。

ルチアだけじゃなくて、お前もだなんて！ クラーズもだなんて！
だって、だって、だって、だって！ もう！ もう！ もう！ も
おお！

俺は、いつからだったんだよ。いつからお前たちは、俺のこと。俺

のこと。

「ああ、あああああああああー！」

幼馴染だった。なあ。

優しくしてくれたじゃないか。ルチアもルクスも。

いつからだよ。いつからだよ。

俺のこと。俺のこと、いつからそんな風に……！

なあ。だって、誘ってくれたじゃないか。一緒に黄泉蔵夫をやるうって。

なあ、褒めてくれたよな？ 嬉しくて、嬉しくて……。

誰も褒めてくれないから。でも、俺は、呪術は才能あるってわかってた。

だから、頑張ったら、二人だけは。なあ?!

いつから、いつからそんな風に思ってたんだよ？ なあ!

ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、いつからだよお!!!!

俺は、俺は!

「ああー!!!」

俺は叫んだ。叫んで、後はもうよく覚えていない。

森の中で、人目を避けるためだろう。

森の中で涙を枯らして、ぼーっと倒木の上に座り込んでいた。

「なあ……」

俺が悪いのかよ？

なあ？ 俺が悪いって言うのかよ？

なあ?! そうだろうなあ! 俺が、俺が悪いんだよなあ?!

勝手に勘違いして、思い上がって、なあ? なあ?! 俺が悪いんだ

よなあ?!

そう言いたいんだろ?! 俺が、俺が悪いんだって! そう言

たいんだろお前たちは! お前たちはそう言いたいんだろ! なあ

! なあアア!

でも! でもじゃあ、じゃあ! 俺はどうしたらよかったんだよお

!

俺は、いつから……。なあ、いつから! いつから、どうしたらよ

かっただよお……。

なあ……。なあ？　なあ?!　なあ?!

「……はっ」

俺は立ち上がると、うつすら白み始めた空の下、黄泉蔵に向かって歩き出した。

黄泉蔵の奥深くに潜ろう。誰にも合わないで済むような、黄泉蔵の奥深くに。もう、誰も殺さなくて済むように。黄泉蔵の奥深くに。

もう、いいさ。どうしたらよかったなんて、もういいさ。

だってそんなこと。今さら聞いたって、

もう遅い。

サブタイトルの解説

「報復絶倒」と「クラーズ」の解説

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。

私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

プロローグのサブタイトル「報復絶倒」。

これが第一話のサブタイトルにも見られる四字熟語「抱腹絶倒」をもじったものであるということは、きつとおわかり頂けているのではないかと思います。

しかし、このサブタイトル。

あのプロローグの内容とは、少しズレているように感じなかったでしょうか？

タイトルやあらすじから考えれば、「報復絶倒」はアモールの「報復」して「絶」対に「倒」す」という決意を示していると考えるのが自然でしょう。

しかし、あのプロローグはアモールが仲間から攻撃を受け倒れるところで終わってしまいます。

復讐を誓うのは続く第1話「抱腹絶倒の目覚め」の最後。

そう考えると、プロローグの内容とはズレているように思えますか？

もちろん、物語全体の内容や結末を暗示したサブタイトルをプロローグに冠するというのはありだと思いますし、実際にそういう意味を込めたという部分もあります。

しかし、プロローグ自体の内容とズレてしまっているサブタイトルは、ちよつとサブタイトルとして残念だとは思いませんか？

実はこの「報復絶倒」には、もう一つの意味があるのです。

それは、第9話「ほうふくぜつとうのこくはく」まで読んで下さった方ならおわかり頂けるのではないのでしょうか。

プロローグまでしか読んでいないと、冒頭は「不当な評価の果てにアモールが殺されかけた」という「追放もののテンプレ」展開のように見えますが。

第9話まで読むと、実はあのプロローグは「アモールによって苦しめられた仲間たちによる報復」のシーンだったことがわかります。

プロローグのサブタイトルである「報復絶倒」は、仲間たちによって「報復」を受け「絶」対絶命の状態で「倒」れた「アモール」を示していたのです。

そう考えると、アモールが倒れたところで終わるプロローグの内容を直接的に表したサブタイトルになるのではないのでしょうか？

あのサブタイトルは、真実を知ることとその真の意味が明らかになるサブタイトルだったのです。

さらに、もう一つ解説を――。

第1話の後で私が、「抱腹絶倒の目覚め」って「絶倒(倒れてる)」「なに」「目覚め(起きてる)」「なのめっちゃ面白くないですか(笑)?!」などと言っていました。

続く第2話「目覚めたならクラス」でアモールが会おう少女、クラス。

彼女の名前の由来はラテン語で「明日」を意味する「cras」です。

目覚めたなら明日――。

というわけで、復讐心で目覚め起き上がり歩み出したアモールはクラスと出会い、彼女に希望を抱き、絶望し、最後にはクラスを自らの手で終わらせて、夜明けを目前にして黄泉蔵の奥深くに潜ってきます。

なんとも暗示的ではないでしょうか……。

単に『Tomorrow』という曲をイメージして「クラース」が登場する物語を選んだだけだったのに、まさかそんなことになるとは……。

書いた自分でもびっくりです。

執筆後、久しぶりに聴いてみた『Tomorrow』は、英語版も日本語版も、作中のクラースと重なる歌詞で、明るい曲の雰囲気があり本作の悲しさを強めました。

おすすめの曲なので、よかったら聴いてみて下さい。

有名な曲ですが、本作と重ねて聴くと、また違った味わいがあるはずです。

【YouTubeより】

映画『ANNIE／アニー』楽曲クリップ “Tomorrow”

<https://www.youtube.com/watch?v=qN16fYHqDpw>

「子鳥は巢にかえる」の解説

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。

私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

第4話のサブタイトル「子鳥は巢にかえる」は、「Curses, like chickens, come home to roost」という海外のことわざが元ネタです。

これは「呪いはひな鳥のように巢にかえる」という意味で、日本の「人を呪わば穴二つ」に相当することわざだそうです。

つまり、直接的には「呪いは自分にかえってくるよ」という意味であり、もつと言うならば「人を傷つけたら自分も痛い目にあうよ」というような意味のことわざですね。

第4話は少女クラスが主人公と共に黄泉蔵（ダンジョン）から帰る道中のエピソードなので、まずは単純に、まだ幼さの残る少女クラスを子どもの鳥（小さい鳥を指す一般的な言葉の小鳥ではなく「子鳥」）に例えたものになっています。

これが前述のことわざの「ひな鳥が巢にかえる」に対応しています。

——「chicken」にはもともと「小娘」や「未熟な者」という意味もある。

ここで質問です。

「クラス」はラテン語で「明日」を意味する「cras」が由来なのですが、この単語と前述のことわざに出てくる「curses（呪い、単数形は curse）」という単語は似ていると思いませんか？

単数形の発音は「カーズ」ですが、綴りも響きも近いので、実はこのサブタイトル「crasがかえる」と「curseがかえる」を掛けた、ちよつとした言葉遊びにもなっているんです。

また、このエピソードのメインは、術者にかえる呪いがものけと
なった「カエリオニ」との戦闘シーンです。この「カエリオニ」と
いう存在は、まさに前述のことわざの具現ですね。

かえる呪いがカエリオニになる原因の一つは、呪いが「未熟」であ
ることです。

これらを暗に示したサブタイトルにもなっています。

そして、ここからは【物語の結末にかかわるネタバレ】ですが――。
いくつかの伏線を経て、第10話「もう遅い」ではクラススが近所
のお姉ちゃんを呪っていたことが発覚しますね。これにより、第4話
で彼女を襲ったカエリオニは彼女自身の呪いによって生じたもので
あることが示唆されます。

そう解釈するとこれは、「子鳥が家にかえるように、家にかえる少女
クラス（cras）自信に呪い（curse）がかえる」というエ
ピソードを示したサブタイトルになるわけです。

色色と詰め込んでみたサブタイトルだったので、いかがだった
でしょうか？

私自身も楽しみながら決めたサブタイトルを、みなさんにも楽しん
で頂いていたなら幸いです。

「しん中の毒」の解説

【警告】

※第7話で申し訳程度の配慮によりあえてぼかしたものについて
明言しますのでご注意下さい

第7話のサブタイトル「しん中の毒」は、最初の「しん」が平仮名
になっていきますね。

実はこの「しん」。変換の誤りではなく、ちよつと苦しい掛詞でし
た。

まずこのサブタイトル、普通に読もうとすれば「心中」と読んで頂
けるんじゃないかと思えます。

「心中の毒」、すなわち復讐に染まったアモールの心中の毒を現して
います。

これは、復讐心そのものもそうですが、復讐に生きるアモールに嘔
気を起こさせていた感情もまた、復讐に毒された彼を苦しめる毒に他
ならないでしょう。

この「心の中の毒」を直接的に表したのが第7話のサブタイトルで
した。

次の読み方に触れる前に、第7話の最後にアモールの嘔気呼び戻
した食品について触れたいと思えます。

※一応、本編では申し訳程度の配慮もあつてぼかしたのですが、こ
こでは明言しますのでご注意下さい。

ずばりそれは、第5話でも名前の出てくる、日本では古くから馴染
みのあるあの食べ物。梅干しです。

その種の中身である「仁^{しん}」には、青酸という人体に有害な成分が含
まれているそうです。

——成熟すると減少し、一般的な加工の過程で分解されるので、流
通している梅干しなどの場合は致死量どころか中毒症状が出るほど

にすら含まれていないらしいですが。

というわけで、二つ目の読み方は「仁中」。

「仁中の毒」というサブタイトルで、本文ではぼかした食べ物を暗に示していたのです。

実際、その食べ物が、アモールにとって有害なもの「毒」になるわけですし。

さらに、「仁」は儒教などの思想において美德の一つとされていてます。

「仁義」という言葉なら、聞いたことがあるという人も多いのではないでしょうか。

この「仁」とは簡単にいうと、「真心」や「慈愛」、すなわち「思いやり」を示します。

第5話の冒頭でクラスは、アモールを心配して声を掛けますが、嘔気をこらえて外の空気を吸いたかったアモールにはありがた迷惑でした。

そして、最後にアモールを思いやつて出した梅干し湯もまた、アモールの嘔気を呼び戻しこらえられなくさせてしまいました。

つまり、「仁中の毒」とは、「思いやり」すなわち「仁」が、「迷惑」すなわち「毒」になっているという第7話のクラスの行いを表しているのです。

さらには、アモールを苦しめていた「心中の毒」。

あれも、彼の中に残る「仁」だったのかもしれない……。

——というわけで、「しん(じん)」には二つの読みがあつたのです。

ちよつと苦しい掛詞でしたね……。

まあ、第5話はアモールが苦しむ回でしたし、クラスも思いやりが裏目に出て苦しかったでしょうから。

そこも引つ掛けているということ、ここは一つ……(笑)。

書いて公開しておいてこんなことを申し上げるのもなんですが……。

苦しい掛詞を身代わりにして、陰惨な物語を読んで下さった読者様

の苦しみが少しでも軽くなりますようにと、自分ごと呪っておこうと
思います。

皆様が幸せでありますように——。

【蛇足】解説・思い

1. 王道をゆく個性

前置き「テーマは本当の後付け」

まず、初めに。

これから申し上げることは全て後付けです。

というのも、私は「テーマでものを書く」タイプの「作家ではない」からです。

例えば。

平和の大切さがテーマで起こされたわけではない戦争の話から、平和の大切さを学べるように。

災害や犯罪の話から教訓を学んだり感動したりできるように、日常の何気ない出来事で和んだり笑ったりできるように。

「テーマ」は「後からついてくるもの」に成り得ると思うのです。発信する段階で、発信者の意図や脚色が介在しようと、物語そのものにテーマは不要だと思ふのです。

そして、テーマや面白さのために観測した物語を歪めてしまったら、それは「作り物の嘘っぱち」になってしまったと思うのです。

もちろん私はフィクションを書いていきますし、全く何も考えて書いていないと言えば嘘でしかありませんが。

それでも、私は「作り物の嘘っぱち」を書きたくはないのです。

条件で絞って検索し観測した物語を、見せ方で工夫し、わからない部分を丁寧に推測し、そうして「文章にした本当」を皆様にお届けして、その上で楽しんで頂けるものを目指しているのです。

例えば本作。

第10話でクラスが、微妙な時間帯のために「昨日や一昨日」がよくわからなくなる描写。

あれは、テンポを悪くするし別に面白くもないし、単なる娯楽のため

めのフィクションとしては不要でしかないと思います。

それでも私には、彼女がするつと喋れた並行世界を観測することが出来なかったし、小綺麗な台詞で本当をねじ曲げてしまいたくなくなかった。

だから、そのままにしたのです。

“小説家”や“作家”としては失格かもしれません。

しかし、私は「肩書きとして生きている、書いている」わけではなく、木村直輝として生きて、書いています。

これを言い訳にしたくはありませんので、精進の日日ですが……。

さながら報道記者のように、真実をお伝えした先で。

まるで小説家の如く、真実以上のものをお届けできるよう。

木村直輝として精進し、尽力して参りたいと思います。

前置きが随分、長くなってしまいました……。

1. 王道をゆく個性

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。

私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

本作は、“小説家になろう”などで流行りの「追放もの」を意識して書かれています。

——最近では流行も下降の一途をたどっているようですが。

正直に申し上げますと、私はWeb小説投稿サイトで滅多に小説を読まないの、情報源は主にまとめサイトでした。

——これも、たまたま見たものでした。

「追放もの」というジャンルの流行や、それら「もう遅い」などが擲

揄されている状況を見て。

双方に共感できる部分もあった反面、対抗心をかきたてられ、アモール達の物語を観測するに至りました。

通常の「追放もの」は主人公に非がなく不当に追放され、追放したかつての仲間達は主人公が抜けたことにより没落。間接的に復讐が果たされるというのがテンプレらしいです。

対する本作は直接的な「復讐譚」であり、実は主人公に大きな非があつたという「叙述トリック」的な内容になっています。

これはもちろん、「需要と供給の偏りが著しいWeb小説投稿サイト」でまず閲覧して頂くため。

そして、「王道が好きでも無個性では飽きる」という読者のジレンマを解決するための一つの策です。

——動きのある戦闘シーンから始まる冒頭に、王道ファンタジーだと思いきや「和風ファンタジー」だったという小さな「意外性」を配置し、興味をひきつつ。

オチにも「意外性」があるという構成になっていました——。

ただ、本作のオチには、流行を活かした「意外性」と「叙述トリックの強化」以外にも大きな意味があります。

それが、この作品を通して私がかきたかったことであり、この「作品のテーマ」です。

前置きにもある通り。

私にとって「テーマは後からついてくるもの」であり、まずは純粋に作品として味わって頂けるのが一番だと思っています。

その上で、私の個人的な思いを、この物語を通して受け取って頂けたらなと思います。

不用意に発信者の思いを吐露しますと、直接関係のない物語のイメージを歪めてしまいかねないので……。

しつこいようですが、あくまで「後付け」であることを念頭に置いた上で、ご興味がおありの方だけに読んで頂ければ幸いです。

2. 主観で構築された世界

〔ネタバレ〕

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。
私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

本作の主人公であるアモール。

彼はひ弱さなどを理由に、幼い頃から周囲に馬鹿にされて育ちました。

そして、大成してからも、呪術のイメージの悪さなどを理由にやはり馬鹿にされていました。

そんな強いコンプレックスは次第に彼を歪め、呪術の才能と彼のひた向きさが仇となり、増長していきます。

その果てに、数少ない友人だった幼馴染みを苦しめ、彼らによって事故に見せかけて殺されかけてしまいます。

しかし、彼らへの憎しみで覚醒した主人公は無敵の呪術師となり、かつての仲間たちに復讐を誓いました。

そして、直後に会った男たち四人を、馬鹿にされたことに腹を立てて殺害。

残虐な復讐を果たし仲間たちを全滅させ、後からやってきた協力者や目撃者も殺害。

最後には、いたいけな少女までを手にかけてしまいます。

客観的にえがいていけば、多くの読者にとってアモールは、同情の余地はあれど「悲しき殺人鬼」としてうつったのではないでしょうか。

あくまでも残忍な「殺人鬼」として。

しかし本作は、プロローグと第6話の最後を除いて、全て「主人公の主観的な視点」で進行していきます。

主人公の苦しみや思い、知識や認識によって世界が構築されている

のです。

多くの読者は主人公に共感し、同調し、一緒になって怒り悲しんで下さったのではないかと思われれます。

主人公の問題点（後述）も、素人が書いたフィクションであることや追放もののテンプレが相まって、スルーされやすかったのではないのでしょうか？

そうであればあるほど、最後。

ルチアの告白によって「アモールに非があったこと」が明かされた時。

読者はアモールと一緒に衝撃を受け、苦しみに共感し、ルクスたちを憎んだ自己を正当化したんじゃないでしょうか。

アモールに感情移入していればしているほど、全貌を知った時、アモールを否定すれば今までの自分を否定することになるからです。

実際、完結直後に頂いた感想の一つは、アモールの非を認めつつも「ルクスたちの非」を挙げて下さっているもので、「アモールへの同情」が強く伺えるものでした。

対して、もう片方は「全員が悪だから、救いようのない話だけど仕方がない」と登場人物全員を自分と切り離して、切り捨てている心理が伺えるコメントでした。

どちらにも、「自己と切り離された『相手を悪者』」にすることで、目の前の悲劇から自己の精神を守る思考パターンが伺えるように思えます。

大変、興味深い感想でもありました。

改めまして、お二方。ありがとうございます。

ただ、私の伝えたいテーマはその「防衛機制」の先にあります。

「防衛機制」とは簡単に言えば「自己を守るための無意識的な心理メカニズム」のことです。

なので、正直に申し上げますと、これからの解説は気分のよいものではないと思います。

もしかすると、貴方様にとって非常に不快な内容になるかもしれま

せん。

私は、読んで下さる方を単に不快にして嫌がらせがしたいわけでは決していないですし、この解説を書こうかどうか迷った部分もあります。

ですから、その上でお読み頂ける方にだけ、お読み頂ければ幸いです。

3. アモールの人物像

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。

私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

テーマについて触れる前に――。

アモール目線で本作をご覧頂いた皆様に、客観的および否定的にアモールを見て頂きたいと思います。

作中では見せ方を工夫していたので、素人が書いたWeb小説であることや「追放もの」というテンプレの助けなどもあり、あまり目立たなかったかもしれませんが。

……（だといいな）。

アモールの問題点は随所に見ることができます。

まず、プロローグ。

戦闘後に、治療役で紅一点のルチアからルクスが荷物を受け取るシーンがあります。ルチアが戦闘中、荷物持ちをしていたわけです。

この直後にイグニスが「貧弱すぎて、女が二人いるんだと錯覚していたよ」などアモールに皮肉を言います。

すぐルチアに「悪かったなルチア。別に女を馬鹿にするつもりはないんだ」とフォローをする程度には気が回るイグニスが、アモールに強い皮肉を言っていたのです。

その後、第2話。

ここで、アモールは食料はおろか飲み物も含め、「なんの荷物も持っていないかった」ことが本人によって明かされます。ルチアでさえも背負い袋を持っていたというのに。

おまけに「いつも先頭を歩くルクスも、来た道を把握する役のルチアやイグニスもないから、俺一人では迷ってしまうのも無理はな

い」という人任せっぷり。

命懸けの黄泉蔵探索で、実力者だからといってこれは慢心しすぎではないでしょうか。

その裏で唯一の前衛アタッカーが荷物を持つ始末。これではパーティーのお荷物と言われるのも無理はないでしょう。

実際、ルチアの告白シーンでは「最近の貴方は非力なのを言い訳にして、荷物の一つも持たないし、状況把握だって心配になるくらい人任せで……」と言われていきます。

私も非力なのであまり他人の^{ひと}ことを偉そうには言えませんが、まずこれが一つ目です。

二つ目は、クラーズに対する態度です。

クラーズはアモールの鼻肩筋（ファン）であり、彼に助けられた少女です。

とはいえ、アモールは彼女から食料を貰い、その後一週間ほど家に泊めて貰っています。

しかし、少なくとも彼は作中で一度もお礼を言っていない。

食料を貰う際には――。

「そんなに言うなら、遠慮なく食わせて貰おうかな」

お茶を淹れると言われて――。

「ああ、湯冷めしそうだったからちようどいいな」

体調の悪そうだったアモールを気遣って何かを淹れてきたクラー

ズに――。

「おつ、なんだ？」

見事に感謝の言葉がないのです。

さらには直接言わないものの、地の文にはおにぎりやお茶の味、湯呑のヒビや扉の立て付けなどに対する文句や嫌悪が並んでいました。

江戸時代と明治時代がごっちゃになったような世界観なので、男尊女卑はあったかもしれませんが。

ルチアやクラーズのお姉ちゃんのように女性も黄泉蔵夫として活躍している世界ですし、少なくとも前述のイグニス配慮と比較する

と、横暴だと言えるのではないでしょうか。

他にも言葉の端々に尊大さが伺えるので、もしよろしければ注意深く読み返して頂けると、とってもうれしいです。

さらに、第5話ではかなりの童貞っぷりを披露していました。

お金を渡した際に指が触れて「今のは、わざと……?」だけなら可愛いいものですが……。

性行を断る口実で「今日、血い出ちやうから」と言われて怪我を疑い、月経のことだとわかるや否や「月経は呪術にも関係してくることだから、俺は詳しいんだ」と地の文で語り始めます。

加えて怪我を疑った際の地の文では、「突き飛ばしてかばってやった」と上から目線な上にクラースを心配する様子はなく。

その流れでの「仕方なかったとはいえ馬鹿なことをした」は、性行が出来なくなるようなことをしてしまった後悔のようにさえとれます。

他にも、第5話には自分勝手に見栄っ張りな勘違い男といえる言動がたくさん見られます。

これらの言動は、ルチアの「貴方、私だけじゃないわよね。特に、自分より立場の弱い女の子には。ねえ、貴方が思うほど人の好意って単純じゃないのよ?」という告白と重なります。

このような人間性を、イグニス「雄々しい雄々しい男の子」と揶揄していたのでしょうか。

まあ、あの回のコラムで申し上げた通り。

私も二十六にもなって誰とも交際したことのない童貞なので、あまり他人のことを偉そうには言えないのですが……。

これらを踏まえて考えると、「デバフ」という表現も怪しくなってきました。

第1話でアモールは「デバフ、とか言い方変えてみても、印象はよくなるなくて……。逆に変なこだわりが気持ち悪いとか言われて」と言っていました。

しかし、ここまでのアモールへの印象を重ねてみると、健気な努力はいっぺん独り善がりに見えるに思えてこないでしょうか。

「ダンジョン」という言葉が死語になっていくという作中では、「鼻筋」や「勝手」、「接吻」どころか「西洋館」や「西洋風行灯」などという言葉が使われるほどに、洋語が出てきませんでした。

プロローグの地の文以外で出てきたのは、人名くらいだったのではないのでしょうか。

そんな社会で「デバフ」などという言い換えは、完全に独り善がりだったのではないのでしょうか。

そう考えると、プロローグでフォローしようとしたルクスの「ほら、なんだ？ デバフ？ 頑張ってくれてるよな？」という言葉の印象も変わってはこないのでしょうか。

そもそも、第8話でルクスが「カチカチ中から腕利きの呪術師たちを集まって貰ったんだ」と言っていることから、呪術師はアモール以外にもいることが伺えます。

誰かを呪い害する「呪術師」のイメージが悪いというのは納得できますが、アモールが陰口をたたかれていた理由は本当にそれだけだったのでしょうか。

アモールは有名パーティーの一員です。

有名人に批判が集まるのは世の常、現代日本でも芸能人やヒット作が「ゴリ押し」などと叩かれるのは日常茶飯事です。

「何もしてない」などという心ない声もあつたことでしょうか。

しかし、ここまでのアモールの行いを見ると、アモールの言動にも大きな問題があつたのではないかと思えてなりません。

もちろん、幼少期に周囲から馬鹿にされて育つたことで抱いた強烈なコンプレックスが土壌となつて、彼の「増長した劣等感」を肥大化させていったに違いありませんが……。

——「増長」には、「程度が次第に強くなること」。そして「傲慢になること。つけあがること」という二つの意味があります。

他にも短気なところなど、細かく挙げると切りがありませんが、最後に花について触れて終わりにしたいと思います。

ここまでアモールのことを散々に言っただけでしたが、彼にも優しいところはありません。

例えば第3話「アモールの優しさ」では、クラスが探すことを諦めていたお姉ちゃんを探すと言い出します。

あの時のアモールは、不器用ながら、他者に対する確かな優しさをを見せていました。

そして、第8話の冒頭。

「昼間は流石に悪いことをしてしまったので、せめてものお詫びにと花を摘んできたのだ」

と、罪悪感をいだけ摘んできた花を枕元に添えています。

これはどうでしょう。

花を贈るということ自体は素敵なことだと思えますし。

花屋で買った豪華な花束よりも、時として道端で摘んだ花の方がうれしかったりすることもあるでしょう。

しかし、幼馴染みが結婚する年齢に達し、少なくともあの社会では立派に成熟した年齢であることが推測されるアモールが。

「今の俺にはあまり金の余裕がないし、クラスの喜びそうな物がイマイチわからない」とはいえ、お詫びとして、摘んできた花を寝ている間に枕元に置いておく、というのはあまりに稚拙ではないでしょうか。

ここまでのアモールの人間性を見ると、私にはそう思えてなりません。

……（あの描写は直前までいれるつもりがなく、なんか自然とそうなったので、少なくとも意識的な作者の意図はありません。）

いかがだったでしょうか？

客観的に見てみると、アモールはかなり問題のある人物に見えてはこないでしょうか。

「過激で子供っぽい」

これは、連載中に第3話から「評価1」を下さった方のコメントより抜粋させて頂いたものです。

※あくまでも一部です

まさしくそれなのです。

——返信の出来ないタイプの評価に付いていた一言だったのが残念でなりません。

過激で子供っぽい、それは「悲劇の殺人鬼」アモールにぴったりの評価ではないでしょうか。

4. 切り捨てた者の目線

〔ネタバレ〕

※【結末】に関する「重大なネタバレ」が含まれています。
私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

突然ですが――。

たとえば、金銭を得るために周到な準備を重ね複数人を殺害した凶悪犯の話聞いたとき。

たとえば、自分の歪んだ欲望を満たすために何人も手にかけて殺人鬼の話聞いたとき。

貴方は、被害者と加害者のどちらの立場に感情移入し、何を思うのでしょうか。

きっと多くの人は、被害者側の立場に感情移入するのではないのでしょうか。

そして、加害者を自分と同じ人間だとは思えないと戦慄し、決して許せないと憎悪し、その全てを否定するのではないのでしょうか。

地下鉄サリン事件などの首謀者、松本智津夫元死刑囚――。
東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の快樂犯、宮勤元死刑囚――。

附属池田小事件の通り魔、宅間守元死刑囚――。
いずれも近代史に残る凄惨な事件を起こし、死刑が執行された人達です。

彼らは幼少期に、貧困、障害を理由にしたいじめ、親からの虐待などにあっていたといえます。

しかし、多くの人にとって彼らは許し難い極悪非道な犯罪者でしょう。

彼らへの同情が嫌悪を上回るといいう人は少ないのではないのでしょうか。

同じようにつらい幼少期を送っていないながら、そのような犯罪に走ら

ずに生きている人達もたくさんいます。

彼らのことを思えば、当然と言えるでしょう。

では、本作のアモールはどうでしょうか。

——フィクションと現実を一緒にするなと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。

確かに、フィクションはフィクションとして、娯楽だと割り切って楽しむのも一つの味わい方でしょう。

ですが、今しているのは、その上で作品にテーマを見いださうという解説です。

現実ではないと割り切って何の教訓も得ないというのでは、そもそも趣旨が違ってきてしまいます。

話を戻しましょう——。

アモールはどうでしょうか。

幼少期から周囲に馬鹿にされて育ったことが、強烈なコンプレックスを育み、それは彼を歪めて増長させていく土壌となったに違いありません。

そんな同情できる子供時代を送った彼はしかし、最終的に多くの人の命を奪った「凶悪犯」になってしまいます。

自分を殺そうとした仲間達以外をも、彼は殺しているのです。激情に駆られ、何人も。

引き金は復讐だったとはいえ、その一因もまた彼にあます。

そして、彼の振る舞いを見るに、遅かれ早かれ凶行に走った可能性は充分あったのではないのでしょうか。

ここで、質問です。

アモールの視点で、アモールに感情移入し、アモールの苦しみや怒りに共感し、アモールと共に衝撃を受けて下さった読者様は。

アモールを凶悪犯として切り捨てることができますか？

心の底から何の迷いもなく、「アモールが悪い」と言い切ることができますか？

本当にそう、割り切れますか？

本作の叙述トリックには、アモールの視点でその凶行をご覧頂くことで、「読者様に凶悪犯の目線になって頂く」という意味もありました。

自分は完全な被害者で、ルチアもクラスも自分のことが好きなのだと思っこんでいたアモールのように。

人は誰しも、「自分の目線でしか物事を見ることが出来ない」から。その「主観的な認識だけで世界を構築している」から。

「自分の目でしかものを見られず、自分の耳でしか音を聞けず、自分の心身でしか万物を感じられず、自分の知っていることすら知らない」ヒトは、どんなに努めたところで、客観視に限度があるから。

このような形で、「主観でしかものを見られないヒトの認識の恐ろしさ」を感じて頂くと共に、「擬似的に凶悪犯の視点を体験」して頂いたのです。

5. 私の思い（直接的なテーマ）

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。
私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

本作には、直接的なテーマが一つと、それを広げた本質的なテーマの二つがあります。

一つ目は、ここまでの流れから察して頂けているのではないでしようか。

「犯罪に対する向き合い方」です。

加害者と被害者を前にした時、その被害が大きければ大きいほど。加害者を憎み、否定し、切り捨てることは、社会的に見てきつと正しいことなのでしょう。

犯罪者を歓迎すれば、社会の秩序は崩壊し、個人の安全は揺らいでしまうに違いないからです。

不幸の一言では到底すまされない不幸に遭った被害者やその遺族には、寄り添い支える人がいてしかるべきに違いないからです。

一緒になって憤ってくれる味方が支えになることもあるでしょう。それには、私も異論はありません。

ですが、同時に思うのです。
その正義に塗り潰された思想だけで、今日よりもよい明日を築けるのだろうか。

ただ目の前の加害者を厳しく糾弾し、排除するだけで、新たな加害者も被害者も生まれなくなるのだろうか。

加害者の立場でもものを見ることも、そこに寄り添うこともまた、社会的に見て必要なのではないのだろうか。

一人の人が、どのような人生を経て加害者に至ったのか。

それを知ることが、新たな加害者を、そして被害者を生まないため

にも必要なことなのではないでしょうか。

加害者になろうとしている人を踏みとどまらせるのにもまた、寄り添う姿勢は必要ではないでしょうか。

過ちを犯した人間を全て死刑か追放で済ませるわけにはいかないこの社会で（首斬りや島流しがあつた時代ならまだしも）、加害者の更正や再犯防止のためにもまた、それは必要なのではないのでしょうか。

もちろん、相反する二つの立場が共存する社会を維持することは、困難極まりないでしょう。

しかし、難しいからといってそれを避け続けた先に、今よりも幸せな社会があるとは、私には思えないのです。

もちろん「結局、犯罪に走ったそいつが悪い」の一言で割り切ってしまうえば楽でしょう。

誰もが他人の不幸を見過ごして、誰もが嘲笑や嫌悪の念を他者に抱くこの世界で、その理屈はそんな自分の浅ましさを正当化してくれるからです。

犯罪者を育てる小さな種を撒き散らさずには生きていけない自分たちを守る、筋の通った免罪符だからです。

だから、割り切れば楽でしょう。

そもそも、ヒトは割り切つて切り捨てて自分を守らずには、うまく生きていかれない弱い生き物なのでしよう。

しかし、世の中はそんなヒトにとって、都合よく出来てはいないと、割り切れるものではないと私は思っています。

——本作でも、ルチアとルクスはアモールを憎み切れず、苦しんでいましたね。

もちろん、誰もが犯罪者を受け入れる社会を作ろうなどと言いたいわけではありません。

先にも述べた通り、犯罪者を歓迎すれば治安は乱れるでしょうし、被害者の味方だつて必要に違いありません。

ましてや、被害者が加害者を全面的に受け入れることなどまず不可能でしょう。罪が大きければ大きいほど、許せなくて当然だと思いま

す。

それでも、被害者に寄り添う者達と加害者に寄り添う者達くらいは、今よりも少し争わずにはいられないのかとは思ってしまいますが……。

それはかなり局所的な部分での話でしかなく、多くの人達にとつてはニュースやフィクションの世界の話であり、大した関心もなければ意識も持ち合わせていないと思うので。

犯罪者うんぬんというのは直接的なテーマであり、極端な一例にすぎず、言うなれば本質的なテーマへの道筋でしかありません。

本作には、さらに広い範囲での本質的なテーマがあります。

6. 私の思い（本質的なテーマ）

【ネタバレ】

※【結末】に関する【重大なネタバレ】が含まれています。

私としましては、興味を持って頂けたのであれば、先に本編をお読み頂けると甚だうれしく思います。

読者の皆様は、本作の悲劇。

誰が悪いと思われませんか？

歪んで増長した末に殺人鬼となったアモールでしょうか。

増長していく仲間と向き合わずに殺すことを選んだルクス達でしょうか。

もしくは、アモールが歪む原因を作った周囲の人々でしょうか。

クラスはどうでしょう。

ほんのいじわるのつもりで、お姉ちゃんを呪ってしまったクラス。

アモールを勘違いさせてしまい、はつきり言えなかったクラス。

彼女は善でしょうか、悪でしょうか。

色んな考え方がありますが。

私は、単に誰が一番悪いなどと割り切れるものではないと、割り切ってしまうてよいものではないと思います。

自分と立場や性格の重ならないキャラクターを切り離し、こいつ（ら）が悪いと割り切ってしまうえば楽でしょう。

しかし、彼らは本当に貴方様と切り離せるキャラクターでしょうか。

貴方様には、アモールのような『尊大な劣等感』が微塵もないと言いきれるでしょうか。

貴方様は、ルクス達と違って友人や同僚達と常に真つ向からぶつかって向き合っているでしょうか。

貴方様は、アモールの周囲の人のように誰かを嘲り見下す気持ちを一瞬も抱いたことがないでしょうか。

クラーヌのようなズルさや臆病さを毛ほども発揮したことがないでしょうか。

きっと、そんなことはないんじゃないかと思います。

本作の登場人物たちがもつ「悪」。

きっとそれは、多かれ少なかれ、誰しもがもつものなんじゃないかと思います。

作中ではそれが最悪のかたちで結実してしまったというだけで、このようなすれ違いや衝突は世の中にありふれているんじゃないかと、私には感じられてなりません。

私も愚かな畜生である一匹のヒトです。

決して偉そうに言える立場ではありません。

しかし、もしも貴方様に余裕がおりなら。

本作が少しでも自分自身を省みるきっかけになったなら、幸いだと思おうのです。

主観でしかものを見れない、私の目にうつる世界で――。

ヒトはみな、誰もが誰かを傷つけて生きています。

ヒト一人の器にみんなは入らないから、誰もが誰かを切り捨てて生きています。

自分（達）が傷つけられるのは嫌だけれど、自分（達）も誰かを傷つけずには生きていかれないから。

ヒトは自分（達）に都合のいい「正しき」を信仰し、それを武器に盾に免罪符にして、他者を傷つけ切り捨てるのです。

それは仕方がないことなのでしょう。

どうしようもないことなのでしょう。

ヒトは弱いから、そうやって自分を正当化して守らなければ健康でいられないから。

だから、それでよいのでしよう。
いいえ、そうあるべきなのでしょう。

「呪いは呪った者にかえる」と言われているように。
正しさをもって他者を傷つけることを正当化すれば、その理屈は自分にも牙をむいてかえってくるとしても。

争いの苦しみからヒトは抜け出せないとしても。

それがヒトの限界だから——。

ヒトは弱いから、そうやって自己を守るほかないから——。

もはや私は、そうあつて欲しいとさえ思っています。

防衛機制によって、今の私の主張を否定して欲しいとさえ思っているのです。

ただ、私はそれが、たまらなく悲しいのです。

悲しみが憤りに転じてしまうほどに、ヒトの愚かしさが憎くて憎くてしかたがなくなってしまうほどに。

ただただどうしようもなく、悲しくてしかたがないのです。

そして、何より……。

……。……。……。

日日、この目に映るせかいを見て——。

もう少し。

もう少しだけ。

貴方のその優しさが、自分（達）の外にいる人に向いてくれたなら。
貴方がその優しさに害されてしまわない範囲で、優しくいてくれたなら。

そんなことを願ってしまう私はきつと、傲慢なのでしょう。

自分勝手な私はただ、一匹の愚かな畜生でしかないのだから——。